

正史を訪れる

十五章 新羅本記

森隆一



慶州 東宮 雁鴨池 (Wikipedia「慶州市」より)

はじめに

西暦が2つある場合、左が 修正新羅の王統 によるもの、右が Wiki によるものである。3つの場合は、左端に再修正王統に依るものを追記。%% 百万遍4号の表 IIII08 には計算ミス

朴王朝

15.1. 第1代 朴 赫居世居西干 121-181, 117-177, BC57-4

% A4, 159, 9289 新羅 01

赫居世の即位年については、修正王統と再修正王統の差は4年で、それほど離れていない。

“始祖の姓は朴氏、諱は赫居世である。前漢の孝宣帝五鳳元年に即位し、居西干と称した。このとき13歳であった。国の名は徐那伐である。是より先、朝鮮の遺民が谷間に分れて住み6個の村をつくった。それらは、閼川楊山村、突山高墟村、觜山珍支村、茂山大樹村、金山加利村、明活山高耶村で、これらが辰韓六部である。高墟村長の蘇伐公が楊山麓を望んだとき、蘿井の傍らの林で、馬が嘶いた。それを観ようとして往ったが、見つけられなかった。かわりに、大きな卵があり、これを割ると、嬰兒が現れ、養った。10歳を超えたときには岐嶷然夙成(?)となった。六部の人は生まれが神異であることから尊び君とした。辰に人は瓠爲朴という。初めの大卵は瓠のようであることから、朴を姓とした。”

始祖 姓朴氏 諱赫居世 前漢孝宣帝 五鳳元年 即位 號居西干 時年十三 國號徐那伐 先是 朝鮮遺民 分居山谷之間爲六村 一曰閼川楊山村 二曰突山高墟村 三曰觜

山珍支村 四曰茂山大樹村 五曰金山加利村 六曰明活山高耶村 是爲辰韓六部 高墟
村長蘇伐公 望楊山麓 蘿井傍林間 有馬 而嘶 則往觀之 忽不見馬 只有大卵 剖之
有嬰兒出焉 則收而養之 及年十餘歲 岐嶷然夙成 六部人 以其生神異 推尊之 至是
立爲君焉 辰人謂瓠爲朴 以初大卵如瓠 故以朴爲姓

赫居世は辰韓六部の人ではなかったことになる。

三国志の 始有六國 稍分爲十二國 に合っている。

高墟村長蘇伐公 は気になる。蘇我氏が思い浮かぶが、関係があるのか。

伐: fá、我: wǒ、徐那伐: xú nà fá

印象として、新羅とは倭王家以外の不足と辰韓の部族が関係があり、近
接している。百濟とは王家同志の親密さが感じられる。

“八年 128, 124, BC50 倭人が兵を発し、境界を侵そうとした。始祖が神徳を
もつことを聞き、還った。” 倭人行兵 欲犯邊 聞始祖有神徳 乃還

“十七年 137, 133, BC41 王は六部を巡撫した。妃の闕英は従い、桑を勧め
た。” 王巡撫六部 妃闕英從焉 勸督農桑 以盡地利

“十九年 139, 135, BC39 下韓の以國が來降した。” 下韓以國來降

この時期に下韓があれば、2韓+倭説は否定される。

“二十一年 141, 137, BC37 京城を築き、金城と号した。” 築京城 號曰金城

金城は王の住む城という意味ではないか。

“是歳 是の年、高句麗の始祖東明が立った。”

高句麗始祖東明立

“宮二十六年 146, 142, BC42 正月 室を金城に設けた。”

營宮室於金城

“三十年 150, 146, BC28 四月 樂浪の將兵が侵入した。”

樂浪人將兵來侵

樂浪郡から將兵が來侵出来る位置にあった。

“三十八年 158, 154, BC20 二月 馬韓の招きに応じて瓠公を派遣した。馬韓王は瓠公をせめて次のようにいった：辰・卞二韓は我が屬國である。・（理解できず）・・瓠公の族姓はわからないが、本は倭人であった。初め瓠で腰を撃ち、海を渡って来た。それで瓠公と称した。”

遣瓠公聘於馬韓 馬韓王讓瓠公曰 辰・卞二韓 爲我屬國 比年不輸職貢 事大之禮 其若是乎 對曰 我國自二聖肇興 人事修天時和 倉庾充實 人民敬讓 自辰韓遺民 以至卞韓・樂浪・倭人 無不畏懷 而吾王謙虛 遣下臣修聘 可謂過於禮矣 而大王赫怒 劫之以兵 是何意耶 王憤欲殺之 左右諫止 乃許歸 前此 中國之人 苦秦亂東來者衆 多處馬韓東 與辰韓雜居 至是寢盛 故馬韓忌之 有責焉 瓠公者 未詳其族姓 本倭人 初以瓠擊腰 渡海而來 故稱瓠公

“三十九年 159, 155, BC19 馬韓王が薨じた。西韓王は前に我々を辱めた、今この国を征服するべきと説いた人がいたが、王は人の災いにつけ込むのは仁でなく行わないといい、弔慰の使いを送った。”

馬韓王薨 或説上曰 西韓王前辱我使 今當其喪 征之其國 不足平也 上曰 幸人之
災 不仁也 不從 乃遣使弔慰

“四十年 160, 156, BC18 百濟の始祖の溫祚が立った。” 百濟始祖溫祚立

“五十三年 173, 169, BC5 東沃沮の使者が来て、良馬二十匹を獻じ言った：
南韓に聖人が現れたことを聞き、臣を派遣した。”

東沃沮使者來 獻良馬二十匹 曰 寡君聞 南韓有聖人出 故遣臣來享

“六十一年 181, 177, 4 三月 居西干昇天した。曇巖寺の北の蛇陵に葬った。”

居西干升遐 葬蛇陵 在曇巖寺北

薨を用いていない。

15.2. 第2代 朴2 南解次次雄 181-201, 177-197, 4-24

% A4, , 9339 新羅 01

“赫居世の嫡子である。背は高く、沈厚な性格で、智略に富む。母は閼英夫人で妃は雲帝夫人である。”

赫居世嫡子也 身長大 性沈厚 多智略 母 閼英夫人 妃雲帝夫人

“元年 181, 177, 4 七月 樂浪兵が来て、金城を数重に囲んだ。盗みをし、退歸した。”

樂浪兵至 圍金城數重 賊俄而退歸

樂浪の兵が囲める位置にあった。慶州で可能か。

部從事吳林以樂浪本統韓國 分割辰韓八國以與樂浪 吏譯轉有異同 臣智激韓忿 攻帶方郡崎離營 時太守弓遵 樂浪太守劉茂興 兵伐之 遵戰死 二郡遂滅韓

との関係は? Wikipedia「帶方郡」では、204年設置とされている。

“三年 183, 179, 6 正月 始祖廟を立てた。”

立始祖廟

何処にあったのか。

“五年 185, 181, 8 正月 王は脱解の賢いことを聞き、長女を娶らせた。”

王聞脱解之賢 長女妻之

“七年 187, 183, 10 七月 脱解を大輔とし、軍國政事を委ねる。”

“十一年 191, 187, 14 倭人が百を超える兵船を派遣し、海沿いの村を掠めた。六部の兵を發し、これを禦いだ。．．．(訳)”

倭人遣兵船百餘艘 掠海邊民戸 發六部勁兵以禦之 樂浪謂内虛 來攻金城 甚急 夜有流星 墜於賊營 衆懼而退 屯於闕川之上 造石堆二十而去 六部兵一千人追之 自吐含山東至闕川 見石堆 知賊衆乃止

“十六年 196, 192, 19 二月 北溟人が田を耕したとき、穢王の印を見つけ、これを獻じた。”

北溟人耕田 得穢王印獻之

“二十一年 201, 197, 24 九月 王は薨じた。蛇陵の蛇陵の園内に葬った。”

王薨 葬蛇陵園内

15.3. 第3代 朴3 儒理尼斯今 201-234, 197-230, 24-57

% A4, , 9366 新羅 01

“母は雲帝夫人で、妃は日知葛文王の女である。あるいは、妃の姓は朴で、許婁王の女、という。” 母雲帝夫人 妃日知葛文王之女也 或云妃姓朴 許婁王之女

“二年 202, 198, 25 二月 始祖廟を祀り、大赦を行った。” 親祀始祖廟 大赦

“九年 209, 205, 32 春 六部の名を改め、姓を賜った。楊山部は梁部とし、姓は李とした。高墟部は沙梁部とし、姓は崔とした。樹部を漸梁部、あるいは、牟梁部とし、姓は孫とした。干珍部は本彼部とし、姓は鄭とした。加利部は漢祗部とし、姓は裴とした。明活部は習比部とし、姓は薛とした。また、十七等の官位を設けた。(以下に、官位名のリスト)”

改六部之名 仍賜姓 楊山部爲梁部 姓李 高墟部爲沙梁部 姓崔 樹部爲漸梁部一云牟梁 姓孫 干珍部爲本彼部 姓鄭 加利部爲漢祗部 姓裴 明活部爲習比部 姓薛 又設官有十七等 一伊伐漚 二伊尺漚 三迺漚 四波珍漚 五大阿漚 六阿漚 七一吉漚 八沙漚 九級伐漚 十大奈麻 十一奈麻 十二大舍 十三小舍 十四吉士 十五大鳥 十六小鳥 十七造位

高句麗は5部であった。1世紀に十七等の官位は無理ではないか。

“十三年 203, 209, 36 八月 樂浪郡が北辺を犯し、朶山城を攻め陥とした。”

樂浪犯北邊 攻陷朶山城

“十四年 204, 210, 37 高句麗王の無恤は樂浪を襲い滅ぼした。その民五千人が投じてきたので、六部に分け住ませた。”

高句麗王無恤 襲樂浪滅之 其國人五千來投 分居六部

“十七年 207, 213, 40 九月 華麗・不耐二縣人の騎兵が共に北境を犯した。貊國の渠帥は要曲河の西でこれを敗った。王は喜び貊國と結好した。”

華麗・不耐二縣人連謀 率騎兵犯北境 貊國渠帥 以兵要曲河西敗之 王喜 與貊國結好

“三十四年 234, 230, 57 九月 王は突然臣寮にいった：(訳) ”

王不豫 謂臣寮曰 脱解身聯國戚 位處輔臣 屢著功名 朕之二子 其才不及遠矣 吾死之後 即大位 以無忘我遺訓

“十月 王は薨じた。”

王薨 葬蛇陵園内

15.4. 第5代 朴 4 婆娑尼師今 234-266, 230-262, 80-112

% A4, , 9391 新羅 01

“儒理王の第二子である。あるいは、儒理王の弟奈老の子ともいう。妃は金氏の史省夫人で、許婁葛文王の女である。”

儒理王第二子也 或云儒理弟 奈老之子也 妃金氏史省夫人 許婁葛文王之女也

“二年 235, 231, 81 二月 始祖廟を祀った。” 親祀始祖廟

“三月 州郡を巡撫した。” 巡撫州郡

“五年 238, 234, 84 二月 明宣を伊滄とし、允良を波珍滄とした。”

以明宣爲伊滄 允良爲波珍滄

“六年 239, 235, 85 正月 百濟が境界を犯した。” 百濟犯邊

“八年 241, 235, 87 七月 朕の不徳で、我が国は西隣りは百濟、南は加耶と接する。．．．” 下令曰

朕以不徳 有此國家 西鄰百濟 南接加耶 徳不能綏 威不足畏 宜繕葺城壘 以待侵軼

“是の月、加召・馬頭の二城を築く。” 是月 築加召・馬頭二城

この頃は百濟や加耶に劣勢であったということか。南は倭ではなく加耶となっている。加耶と倭の関係は？ 倭は九州へ移住した？

修正・再修正王統ならば、時期的に成り立つ。

南解次次雄十一年 201, 187, 14 の記事は倭人である。

“十四年 247, 243, 93 正月 允良を伊滄とし啓其を波珍滄とした。”

拜允良爲伊滄 啓其爲波珍滄

“十五年 248, 244, 94 二月 加耶の賊が馬頭城を囲んだ。阿滄の吉元と將騎一千を派遣しこれを撃走させた。”加耶賊圍馬頭城 遣阿滄吉元 將騎一千撃走之

“八月 関川で閲兵をした。”

閲兵於関川

“十七年 250, 246, 96 七月 南よりの暴風があり、金城の南の大樹が抜けた。”

暴風自南 拔金城南大樹

“九月 加耶人が南鄙を襲った。加城主長世を派遣したが、賊に殺された。王は怒り、勇士五千を率いて戦いこれを破った。”

加耶人襲南鄙 遣加城主長世拒之 爲賊所殺 王怒率勇士五千 出戦敗之 虜獲甚多

“十八年 251, 247, 97 正月 加耶を伐とうとしたが、謝罪の使いをよこしたため、取り止めた。”

舉兵欲伐加耶 其國主遣使請罪 乃止

“二十二年 255, 251, 101 二月 月城を築いた。”

築城名月城

“七月 月城に居を移した。”

王移居月城

“二十三年 256, 252, 102 音汁伐國と悉直谷國が国境を争った。王はこれを難しいとし、金官國の首露王は老年で博識であるのでこれを問うのがよいと言った。首露王は審議し、争そっている地は音汁伐國に属するとした。ここで、王は首露王を饗応するよう六部に命じた。五部の皆は伊?Iを主とし、唯漢祇部は位卑者を主とした。．．．”

音汁伐國與悉直谷國爭疆 詣王請決 王難之謂 金官國首露王 年老多智識 召問之
首露立議 以所爭之地 屬音汁伐國 於是 王命六部 會饗首露王 五部皆以伊漚爲主
唯漢祇部 以位卑者主之 首露怒 命奴耽下 里 殺漢祇部主保齊而歸 奴逃依音汁伐主
陁鄒千家 王使人索其奴 陁鄒不送 王怒 以兵伐音汁伐國 其主與衆自降 悉直・押督
二國王來降

漚は新羅の骨品制の京位の位。9位までは、
伊伐漚>伊(尺)漚>迺漚>波珍漚>大阿漚>阿漚>一吉漚>沙漚>級伐漚

“二十五年 258, 254, 104 七月 悉直が叛したため、兵を發しこれを平討した。”

悉直叛 發兵討平之 徙其餘衆於南鄙

“二十六年 259, 255, 105 正月 百濟に使いを遣り、請和した。” 百濟遣使請和

“二十七年 260, 256, 106 八月 馬頭城主に命じて、加耶を伐たせた。”

命馬頭城主 伐加耶

“二十九年 262, 258, 108 五月 洪水があり、民が飢えた。十道に使いを發し、
倉を開き食料を給した。兵を遣り、比只國・多伐國・草八國を討たせた。”

大水 民飢 發使十道 開倉賑給 遣兵伐比只國・多伐國・草八國并之

“三十三年 266, 262, 112 王は薨じた。”

王薨 葬蛇陵園内

15.5. 第6代 朴5 祇摩尼斯今 266-288, 262-284, 112-134

% A4, , 9449 新羅 01

“祇味ともいう。母は史省夫人で、妃は金氏の愛禮夫人で、葛文王の摩帝の女である。 或云祇味 母史省夫人 妃金氏愛禮夫人 葛文王摩帝之女也

“二年 267, 263, 113 二月 始祖廟を祀った。昌永を伊滄とし、政事に加わった。玉權を波珍滄とし、申權を一吉滄とし、順宣を級滄とした。

親祀始祖廟 拜昌永爲伊滄 以參政事 玉權爲波珍滄 申權爲一吉滄 順宣爲級滄

“三月 百濟が使いを派遣し、招いた。” 百濟遣使來聘

“四年 269, 265, 115 二月 加耶が南邊を寇した。” 加耶寇南邊

“七月 加耶に親征した。黄山河を渡るとき、加耶人は伏兵を林の薄い所に置いた。王はこれを知らず、伏兵に數重に囲まれたが、王は軍を奮わせ攻撃し、退いた。” 親征加耶 帥歩

騎度黄山河 加耶人伏兵林薄以待之 王不覺直前 伏發圍數重 王揮軍奮擊 決圍而退

“五年 270, 266, 116 八月 將を遣り加耶を侵させた。王は精兵一萬で繼けたが、加耶は嬰城を固く守った。”

遣將侵加耶 王帥精兵一萬以繼之 加耶嬰城固守 會久雨 乃還

“十年 275, 271, 121 正月 翌宗を伊滄、昕連を波珍滄、林權を阿滄とした。”

以翌宗爲伊滄 昕連爲波珍滄 林權爲阿滄

“四月 倭人が東邊を侵した。”

倭人侵東邊

“十一年 276, 272, 122 四月 倭の大兵が來襲し、争って山谷遁げた。王伊?に命じたが、 翌宗等が諭したので止めた。”

倭兵大來 争遁山谷 王命伊? 翌宗等諭止之

“十二年 277, 273, 123 三月 倭國と講和した。”

與倭國講和

“十四年 279, 275, 125 正月 靺鞨が大挙して北境に入り、吏民を殺掠した。”

靺鞨大入北境 殺掠吏民

“七月 又大嶺柵を襲い、泥河を過ぎた。王は書を送り百濟に救援を請うた。百濟は五將軍で救援したので、賊はこれを聞き退いた。”

又襲大嶺柵 過於泥河 王移書百濟請救 百濟遣五將軍助之 賊聞而退

“十八年 283, 279, 129 伊?の昌永が卒した。波珍?の玉權を伊?とし、政事に加わった。”

伊? 昌永卒 以波珍?玉權爲伊? 以參政事

“二十三年 288, 284, 134 王は薨じた。”

王薨 無子

ここまでで、倭人・倭兵・倭国がこの順で現れた。倭人は、倭の残留部族、倭兵は倭の遠征軍で、倭国は国家間の事項に用いられているようである。新羅にはこれが判定できた。

この他に倭賊が1回使われている。

15.6. 第7代 朴6 逸聖尼師令 288-308, 284-304, 134-154

% A4, , 9485 新羅 01

“儒理王の長子、あるいは、日知葛文王の子である。妃は朴氏で支所禮王の女である。” 儒理王之長子 或云日知葛文王之子 妃朴氏 支所禮王之女

“元年 288, 284, 134 九月 大赦を行った。” 大赦

“二年 289, 285, 135 正月 始祖廟を祀った。” 親祀始祖廟

“三年 290, 286, 136 正月 雄宣を伊滄とし、内外兵馬の事を受け持たせた。近宗を一吉滄とした。” 拜雄宣爲伊滄 兼知内外兵馬事 近宗爲一吉滄

“四年 291, 287, 137 二月 靺鞨が塞に入り、長嶺の五柵を焼いた。”

靺鞨入塞 燒長嶺五柵

“五年 292, 288, 138 二月 金城に政事堂を置いた。” 置政事堂於金城

“十月 北を巡り、太白山を祀った。” 北巡 親祀太白山

“六年 293, 289, 139 八月 靺鞨が長嶺を襲い、民口を虜掠した。10月 また来た。” 靺鞨襲長嶺 虜掠民口 十月 又來

“七年 294, 290, 140 二月 柵長嶺を立て、靺鞨に備えた。” 立柵長嶺 以防靺鞨

“九年 296, 292, 142 七月 羣公を召して靺鞨を征することを相談した 伊滄の雄は不可と言上したので取り止めた。”

召羣公議征靺鞨 伊滄雄宣上言不可 乃止

“十三年 300, 296, 146 十月 押督が叛いた。兵を發し、これを討った。彼らを南の地に移した。” 押督叛 發兵討平之 徙其餘衆於南地

“十四年 301, 297, 147 七月 智勇に優れたものを將帥とするように臣寮に命じた。” 命 臣寮 各舉智勇堪爲將帥者

“十五年 302, 298, 148 朴阿道を葛文王とした。” 封朴阿道爲葛文王

(注: 新羅追封王 皆稱葛文王 其義未詳)

“十八年 305, 301, 151 二月 伊滄の雄宣が卒した。大宣を伊滄とし、内外兵馬の事を受け持たせた。” 伊滄雄宣卒 以大宣爲伊滄 兼知内外兵馬事

“二十一年 308, 304, 154 王は薨じた。” 王薨

前王からの倭との抗争は、修正年譜を採用すれば、三国史の倭人条の倭の抗争と同じ年代となる。前新羅の1つは倭の国であったことになる。

15.7. 第8代 朴 7 阿達羅尼斯今 308-338, 304-334, 154-184

% A4, , 9529 新羅 02

“母は朴氏で、支所禮王之女である。妃は朴氏の内禮夫人で、祇摩王之女である。”
母朴氏 支所禮王之女 妃朴氏内禮夫人 祇摩王之女也

“元年 308, 304, 154 三月 繼元を伊滄とし、軍国政の事を委ねた。”

以繼元爲伊滄 委軍國政事

“二年 309, 305, 155 正月 始祖廟を祀った。大赦を師、興宣を一吉滄とした。”

親祀始祖廟 大赦 以興宣爲一吉滄

“四年 311, 307, 157 二月 甘勿と馬山の二県を、始めて、置いた。”

始置甘勿馬山二縣

“五年 312, 308, 158 三月 竹嶺を開いた。倭人を招いた。” 開竹嶺 倭人來聘

“十二年 319, 315, 165 十月 阿?の吉宣は謀叛が發覺し、百濟に亡命した。王は送り引き渡しを求めたが、百濟は許さなかった。王は怒り出兵したが、百濟は嬰城を守り出撃しなかったため、糧食が盡き歸った。”

阿滄吉宣謀叛 發覺 懼誅亡入百濟 王移書求之 百濟不許 王怒出師伐之 百濟嬰城
守不出 我軍糧盡乃歸

“十四年 321, 317, 167 七月 百濟は破國の西二城を襲い、民口一千を捕虜として去った。”
百濟襲破國西二城 虜獲民口一千而去

“八月一吉滄、兵二萬を率いて百濟を伐るように命じた。王も自ら八千騎を率いて漢水に臨んだ。百濟王は大いに懼れ捕虜の男女を還し、和を請うた。”

一吉滄興宣

領兵二萬伐之 王又率騎八千 自漢水臨之 百濟大懼 還其所掠男女 乞和

“十五年 322, 318, 168 四月 伊滄の繼元が卒した。興宣を伊滄とした。”

伊滄繼元卒 以興宣爲伊滄

“十七年 324, 320, 170 十月 百濟が辺境を寇した。”

百濟寇邊

“十九年 326, 322, 172 正月 仇道を波珍滄とし、仇須兮を一吉滄とした。”

以仇道爲波珍滄 仇須兮爲一吉滄

“二十年 327, 323, 173 五月 倭女王の卑彌乎は招聘の使いを送った。”

倭女王卑彌乎遣使來聘

卑彌乎にのみだけ王名があるのは、正史を写したのか？

“三十一年 338, 334, 184 正月 王は薨じた。”

王薨

昔王朝

15.8. 第4代 昔 | 脱解尼師今 234-257, 162-185, 57-80

% A4, ,9529 新羅 01

“吐解ともいう。このとき 62 歳であった。姓は昔で、妃は阿孝夫人である。”
一云吐解 時年六十二 姓昔 妃阿孝夫人

“脱解は多婆那國の生まれである。その国は倭国の東北千里にある。多婆那國王は娶女國の王女を妻とした。彼女は妊娠 7 年で大きな卵を産んだ。人々は不祥としてこれを棄てるようにいったが、彼女は帛の袋に入れ海に流した。卵は金官国の海辺に流れ着いた。金官の人はこれを怪しんで放置した。卵は辰韓の阿珍浦口に流れ着いた。これは始祖の赫居世の在位三十九年のことである。老母が繩を用いて引き上げ、これを開けたら子供がいた。老母はこの子供を養った。 . . . 脱解と名付けた。”

脱解本多婆那國所生也 其國在倭國東北一千里 初其 國 王 娶女國王女爲妻 有娠七年 乃生大卵 王曰 人而生卵不祥也 宜棄之 其女不忍 以帛裏卵並寶物置於櫃中 浮於海 任其所往 初至金官國海邊 金官人 怪之不取 又至辰韓阿珍浦口 是始祖赫居世 在位三十九年也 時海邊老母 以繩引擎海岸 開 見之 有一小兒在焉 其母取養之 . . . 宜名 脱解

この記事は、11.2 節で扱った。

“二年 235, 163, 58 正月 瓠公を大輔とした。”

拜瓠公爲大輔

先王の儒理尼斯今が官位制を置いた。婆娑尼師今からは、この官位の記事となっている。

“二月 始祖廟を祀った。”

親祀始祖廟

“三年 236, 164, 59 五月 倭国と友好を結んだ。”

與倭國結好交聘

“五年 238, 166, 61 八月 馬韓の將孟召は覆巖城を陥落した。”

馬韓將孟召 以覆巖城降

“七年 240, 168, 63 十月 百濟王が地を拓き、娘子谷城に至った。使いを送り会見を要請したが、王は行かなかった。”

百濟王拓地 至娘子谷城 遣使請會 王不行

“八年 241, 169, 64 八月 百濟は兵を派遣し、蛙山城を攻めた。”

百濟遣兵 攻蛙山城

“十月 その後また狗壤城を攻めた。王は騎兵二千を派遣し、これを撃走した。”

又攻狗壤城 王遣騎二千 撃走之

“九年 242, 170, 65 春三月 金城の西の始林の樹間で、鶏の鳴声を、王は夜に聞いた。・・・以其出於金檀(?) 姓を金氏、始林を鶏林と改名し、国名とした。”

王夜聞

金城西始林樹間 有鶏鳴聲・・・以其出於金檀 姓金氏 改始林名鶏林 因以爲國號

“十年 243, 171, 66 百済が蛙山城を攻め取り、200 人を留め守らせた。後で、
取り返した。” 百済攻取蛙山城 留二百人居守 尋取之

“十一年 244, 172, 67 正月 朴氏を貴戚とし、国内州郡を分理し、州主・郡主
とした。” 以朴氏貴戚 分理國內州郡 號爲州主・郡主

“二月 順貞を伊伐滄とし、政治を委ねた。” 以順貞爲伊伐滄 委以政事

貴戚： 貴人の親戚。貴族。(ウィクショナリー日本語版)

伊伐滄は官位。

“十四年 247, 175, 70 百済が侵入した。” 百済來侵

“十七年 250, 178, 73 倭人が木出島を侵した。王は角干の羽鳥派遣しこれを
を禦ぐが、克てず、羽鳥は戦死した。”

倭人侵木出島 王遣角干羽鳥禦之 不克 羽鳥死之

“十八年 251, 179, 74 八月 百済が辺境を寇した。兵を派遣し、これを拒ん
だ。” 百済寇邊 遣兵拒之

“十九年 252, 180, 75 十月 百済が西鄙の蛙山城を攻め、これを抜いた。”

百済攻西鄙蛙山城 拔之

“二十年 253, 181, 76 九月 百済に兵を派遣し、蛙山城を取り戻した。百済
から来て住み着いたものが 200 人ほどいたが、これらを悉く殺した。”

遣兵伐百済 復取蛙山城 自百済來居者二百餘人 盡殺之

“二十一年 254, 182, 77 八月 阿滄の吉門は加耶兵と黄山津口で戦い、獲一

千級余りを獲えた。”

阿漥 吉門與加耶兵 戰於黃山津口 獲一千餘級 以吉門爲波珍漥 賞功也

“二十四年 257, 185, 80 八月 王は薨じた。”

王薨 葬城北壤井丘

15.9. 第9代 昔2 伐休尼斯今 257-269, 185-197, 184-196

% A4, ,9621 新羅 02

“脱解王子の仇鄒角干の子で、母の姓は金氏である。”

脱解王子仇鄒角干之子也 母姓金氏

“二年 258, 186, 185 正月 始祖廟を祀り、大赦をした。” 親祀始祖廟 大赦

“二月 波珍滄仇道と一吉滄仇須兮を左右軍主とし、召文国を伐った。軍主の名はここに始まる。”

拜波珍滄仇道一吉滄仇須兮爲左右軍主 伐召文國 軍主之名始於此

“三年 259, 187, 186 七月 南の新県が嘉禾を進貢した。” 南新縣進嘉禾

“五年 261, 189, 188 二月 百濟が母山城を攻めた。波珍滄の仇道を出兵させ、これを拒んだ。” 百濟來攻母山城 命波珍滄仇道 出兵拒之

“六年 262, 190, 189 七月 仇道は百濟と狗壤で戦い、勝った。五百餘級を殺獲した。” 仇道與百濟戰於狗壤 勝之 殺獲五百餘級

“七年 263, 191, 190 八月 百濟が西境の圓山郷を襲い、缶谷城に進み囲んだ。仇道は勁騎五百を率いこれを撃った。百濟兵はいつわって逃げた。仇道は追って蛙山に至って百濟に敗れた。王は仇道の失策をもって缶谷城主をとがめ、薛支を左軍主とした。”

百濟襲西境圓山郷 又 進圍缶谷城 仇道率勁騎五百擊之 百濟兵佯走 仇道追及蛙

山 爲百濟所敗 王以仇道失策 貶爲缶谷城主 以薛支爲左軍主

“八年 264, 192, 191 九月 (訳)”

蚩尤旗見于角亢

“九年 265, 193, 192 正月國良を阿漚とし、述明を一吉漚とした。”

拜國良爲阿漚 述明爲一吉漚

“十年 266, 194, 193 六月 倭人が大飢饉にあった。千人余りが食を求めて来た。”

倭人大饑 來求食者千餘人

これが可能となる倭人との位置関係は、大量の難民が可能なこと、少なくとも陸続きであることと、大飢饉とはなっていない程度離れていることが考えられる。

“十三年 269, 197, 196 四月 王宮の南の大樹がゆれた。また、金城の東門もゆれた。”

震宮南大樹 又震金城東門

“王は薨じた。”

王薨

15.10. 第10代昔3奈解尼師今 269-303, 197-231, 196-230

% A4, ,9651 新羅 02

“母は内禮夫人で、妃は昔氏で助賁王の妹である。”

母内禮夫人 妃 昔氏 助賁王之妹

“二年 270, 198, 197 正月 (謁の訳が見つからない。これまでは親祀が用いられていた。)”

謁始め祖廟

“四年 272, 200, 199 七月 百濟が境界を侵した。”

百濟侵境

“六年 274, 202, 201 二月 加耶國が請和した。”

加耶國請和

“八年 276, 204, 203 十月 靺鞨が境界を犯した。”

靺鞨犯境

“十年 278, 206, 205 二月 眞忠を一伐滄とし、国政に加えた。”

拜眞忠爲一伐滄 以參國政

“十二年 280, 208, 207 正月 王子利音、奈音ともいう、を伊伐滄とし、内外兵馬の事を兼ねさせた”。 拜王子利音 或云奈音 爲伊伐滄 兼知内外兵馬事

“十三年 281, 209, 208 四月 倭人が境界を犯した。伊伐滄利音を派遣したが、將兵はこれを拒んだ。”

倭人犯境 遣伊伐滄利音 將兵拒之

“十四年 282, 210, 209 七月 浦上八國が共謀し加羅を侵したので、加羅の王子は来て救援を要請した。王は太子の子老と伊伐?の利音に六部兵を率いてこれを救うことを命じた。擊殺八國將軍を擊殺し、六千人を捕虜として

還った。”

浦上八國 謀侵加羅 加羅王子來請救

王命太子于老與伊伐滄利音 將六部兵 往救之 擊殺八國將軍 奪所虜六千人 還之

“十六年 284, 212, 211 正月 萱堅を伊滄とし、允宗を一吉滄とした。”

拜萱堅爲伊 允宗爲一吉滄

“十七年 285, 213, 212 三月 加耶は王子を質として送った。” 加耶送 王子爲質

“十九年 287, 215, 214 七月 百濟が來攻し西腰車城を囲み、城主薛夫を殺した。王は命伊伐?の利音に命じ、精兵六千を率いて百濟を伐たせた、沙城を破った。”

百濟來攻國西腰車城 殺城主薛夫 王命伊伐滄利音 率精兵六千伐百濟 破沙城

“二十三年 291, 219, 218 七月 武庫兵物自出 百濟人が來て山城を囲んだ。王は自ら兵を率いて出撃し、これを敗走させた。”

武庫兵物自出 百濟人來圍山城 王親率兵出擊走之

“二十五年 293, 221, 220 三月 伊伐滄の利音が卒した。忠萱を伊伐滄とし、内外兵馬の事を兼ねさせた。” 伊伐滄利音卒 以忠萱爲伊伐滄 兼知兵馬事

“二十七年 295, 223, 222 十月 百濟兵が牛頭州に入った。伊伐滄の忠萱と將兵はこれを拒み、熊谷で賊を敗った。單騎ひき返し、鎮主を貶めた。連珍を伊伐滄とし、知兵馬事を兼ねさせた。” 百濟兵入牛頭州 伊伐滄

忠萱 將兵拒之 至熊谷 爲賊所敗 單騎而返 貶爲鎮主 以連珍爲伊伐滄 兼知兵馬事

“二十九年 297, 225, 224 七月 伊伐?の連珍は百濟と烽山下で戦い、これを破り、一千餘級を獲た。” 伊伐滄 連珍 與百濟戰烽山下 破之 殺獲一千餘級

“八月 烽山城を築いた。”

築烽山城

“三十二年 230, 228, 227 三月 波珍滄の康萱を伊滄とした。”

拜波珍滄 康萱爲伊滄

“三十五年 233, 231, 230 三月 王は薨じた。”

王薨

15.11. 第11代 昔4 助賁尼師金 303-320, 231-248, 230-247

% A4, , 9699 新羅 02

母金氏玉帽夫人 仇道葛文王之女 妃阿爾 兮夫人 奈解王之女也

母は金氏の玉帽夫人で、仇道葛文王の女である。妃は阿爾兮夫人で、奈解王の女である。

“元年 303, 231, 230 連忠を伊滄 とし、軍国の事を委ねた。”

拜連忠爲伊滄 委軍國事

“七月 (?謁の訳) ” 謁始祖廟

“二年 304, 232, 231 七月 伊滄の于老を大將軍として、甘文國を討ち破り、其の地を郡とした。” 以伊滄于老爲大將軍 討破甘文國 以其地爲郡

“三年 305, 233, 232 四月 倭人が突然金城を囲んだ。王は自ら出て戦い、賊を潰走させた。輕騎で追撃させ、一千餘級を獲た。”

倭人猝至圍金城 王親出戰 賊潰走 遣輕騎追擊之 殺獲一千餘級

“四年 306, 234, 233 五月倭兵が東邊を攻め荒らした。” 倭兵寇東邊

“七月 伊滄の于老と倭人が沙道で戦った。風に乗じて船に火をつけ、賊は悉く水死した。” 伊滄于老與倭人戰沙道 乘風縱火焚舟 賊赴水死盡

“七年 309, 237, 236 二月 骨伐國王の阿音夫が民を率いて來降した。第宅を賜り、田莊を安泰とし、其の地を郡とした。”

骨伐國王阿音夫 率衆來降 賜第宅 田莊安之 以其地爲郡

“十一年 313, 241, 240 百濟が西邊を侵した。” 百濟侵西邊

“十五年 317, 245, 244 正月 伊滄の于老を舒弗邯とし、兵馬の事を兼ねさせた。” 拜伊滄于老爲舒弗邯 兼知兵馬事

“十六年 318, 246, 245 十月 高句麗侵が北邊を侵した。于老将兵が出撃したが克てなかった。．．．” 高句麗侵北邊

于老将兵 出撃之 不克 退保馬頭柵 其夜苦寒 于老勞士卒 躬 燒柴煖之 羣心感激

“十八年 320, 248, 247 夏五月 王は薨じた。” 王薨

15.12. 第12代 昔5 沾解尼斯今 320-334, 248-262, 247-261

% A4, , 9730 新羅 02

“元年 320, 248, 247 七月 謁始祖廟(?)。父骨正を世神葛文王に封じた。”

謁始祖廟 封父骨正爲世神葛文王

“二年 321, 249, 248 正月 伊滄の長萱を舒弗邯とし、国政に加えた(?)。”

以伊滄長萱爲舒弗邯 以參國政

“二月 高句麗に使いを遣り和を結んだ。”

遣使高句麗結和

“三年 322, 250, 249 四月 倭人が舒弗邯于老を殺した。”

倭人殺舒弗邯于老

“九年 328, 256, 255 九月 百濟が來侵した 一伐滄の翊宗が槐谷西で迎え撃ったが、賊に殺された。”

百濟來侵 一伐滄翊宗 逆戰於槐谷西 爲賊所殺

“十月 百濟烽山城を攻めたが落とせなかった。”

百濟攻烽山城 不下

“十五年 334, 262, 261 二月 達伐城を築き、奈麻の克宗を城主とした。”

築達伐城 以奈麻克宗爲城主

“三月 百濟が使を送り和を請うたが、許さなかった。”

百濟遣使請和 不許

“十二月 王は重い病にかかり、薨じた。”

王暴疾

15.13. 第14代昔6儒禮尼師今 334-348, 262-276, 284-298

% A4, , 9756 新羅 02

“助賁王の長子。母は朴氏で、葛文王奈音の女である。”

助賁王長子 母朴氏 葛文王奈音之女

“二年 335, 263, 285 正月 (訳)”

謁始祖廟

“二月 伊滄の弘權を舒弗邯とし、機務を委ねた。”

拜伊滄弘權爲舒弗邯 委以機務

“三年 336, 264, 286 正月 百濟は講和の使いを派遣した。” 百濟遣使請和

“四年 337, 265, 287 四月 倭人が襲い一禮部を焼き、一千人を虜として去った。”

倭人襲一禮部縱火燒之 虜人一千而去

“六年 339, 267, 289 五月 倭兵が来たと聞き、兵船を取り繕った。”

聞倭兵至 理舟楫 繕甲兵

“八年 341, 269, 291 正月 末仇を伊伐滄とした。末仇は忠貞で、智略に富み、王も常に政要を聞いている。”

拜末仇爲伊伐滄 末仇忠貞 有智略 王常訪問政要

“九年 342, 270, 292 六月 倭兵が沙道城を攻め陥とした。一吉滄の大谷に命じ救わせた。”

倭兵攻陥沙道城 命一吉滄大谷 領兵救完之

“十年 343, 271, 293 二月 沙道城を改築し、沙伐州の豪民八十家余りを移し

た。”

改築沙道城 移沙伐州豪民八十餘家

“十一年 344, 272, 294 夏 倭兵が来て長峯城を攻めたが、失敗した。”

倭兵來攻長峯城 不克

“十二年 345. 273, 295 春 王は臣下に、倭人はしばしば我が城邑を犯す。百姓は不安でいるので、吾は百濟と強調することを望む。．．．”

王謂臣下曰 倭人屢犯我城邑 百姓不得安居 吾欲與百濟謀 一時浮海 入擊其國 如何 舒弗邯弘權對曰 吾人不習水戰 冒險遠征 恐有不測之危 況百濟多詐 常有吞噬我國之心 亦恐難與同謀 王曰 善

“十四年 347, 275, 297 智良を伊滄とし、長昕を一吉滄とし、順宣を沙滄とした。伊西古國が来て金城を攻めた。我々は大兵をあげて防禦したが、ふせげなかった。忽有異の兵が来た。．．．”

以智良爲伊滄 長昕爲一吉滄 順宣爲沙滄 伊西古國 來攻金城 我大舉兵防禦 不能攘 忽有異兵來 其數不可勝紀 人皆珥竹葉 與我軍同?賊 破之 後不知其所歸 人或見竹葉數萬積於竹長陵 由是 國人謂 先王以陰兵助戰也

“十五年 348, 276, 298 十二月 王は薨じた。”

王薨

15.14. 第15代 昔7 基臨尼師今 348-360, 276-288, 298-310

%% A4, , 9790 新羅 02

“助賁尼師今の孫で、父乞淑伊滄である。” 助賁尼師今之孫也 父乞淑伊滄

“二年 349, 277, 299 正月 長昕爲伊滄とし、内外兵馬の事を兼ねさせた。”

拜長昕爲伊滄 兼知内外兵馬事

“二月 始祖廟を祀った。”

祀始祖廟

“三年 350, 278, 300 正月 倭国と交聘した。”

與倭國交聘

“十年 357, 285, 307 国名を新羅に戻した。”

復國號新羅

どう呼んでいたのか。第22代 智證王からは、斯羅、斯盧。

国名を新羅に戻す。これが正しいければ、以前に新羅と言っていて、その後、別の名前に変えていることになる。作為とすれば、何が考えられるか。

“十三年 360, 288, 310 六月 王は薨じた。”

王薨

前王から倭の記事のニュアンスが異なってきた感じがする。

15.15. 第16代昔8訖解尼師今 360-406, 288-334, 310-356

% A4, , 9820 新羅 02

“父子老角干で、母は命元夫人で助賁王の女である。”

父子老角干 母命 元夫人 助賁王女也

“二年 361, 289, 311 正月 急利を阿漚とし、政要を委ね、内外兵馬の事を兼ねさせた。”

以急利爲阿漚 委以政要 兼知内外兵馬事

“二月 始祖廟を祀った。”

親祀始祖廟

“三年 362, 290, 312 三月 倭國王が使いを送り、求婚を求めてきた。阿漚の急利の娘を送った。”

倭國王遣使 爲子求婚 以阿漚急利女送之

“五年 364, 292, 314 正月 阿漚の急利を伊漚とした。”

拜阿漚急利爲伊漚

“二十八年 387, 315, 337 二月 百濟に使いを送った。”

遣使聘百濟

“三十五年 394, 322, 344 二月 倭國が求婚の使いを送ってきた。既に娘を送っているので断った。”

倭國遣使請婚 辭以女既出嫁

“三十六年 395, 323, 345 正月 康世を伊伐漚とした。”

拜康世爲伊伐漚

“二月 倭王は絶交の書を送ってきた。”

倭王移書絶交

“三十七年 396, 324, 346 倭兵が突然風島に来て、辺戸を掠め、に進んで金城を囲み急攻した。王は兵を出し戦おうとしたが、伊伐漚康世は言った：・・・”

倭兵猝至風島 抄掠邊戸 又進圍金城急攻 王欲出兵相戰 伊伐瀆康世曰 賊遠至 其鋒不可當 不若緩之待其師老 王然之 閉門不出 賊食盡將退 命康世率勁騎 追擊走之

“四十七年 406, 334, 356 四月 王は薨じた。”

王薨

金王朝

15.16. 第13代 金 | 味鄒尼斯今 334-356, 262-284

%% A4, , 9854 新羅 02

ここからは、修正と再修正は同じであるから、1つにする。

“姓は金で、母は朴氏で葛文王伊滄の女である。妃は昔氏の光明夫人で助賁王の女である。．．．”（これは11.2節で扱った。）

姓金 母朴氏 葛文王伊滄之女 妃昔氏光明夫人 助賁王之女 其先闕智 出於雞林
脱解王得之 養於宮中 後拜爲大輔 闕智生勢漢 勢漢生阿道 阿道生首留 首留生郁甫
郁甫生仇道 仇道則味鄒之考也 沾解無子 國人立味鄒 此金氏有國之始也

“二年 335, 263 正月 伊滄の良夫を舒弗邯とし、内外兵馬の事を兼ねさせた。”
拜伊滄良夫爲舒弗邯 兼知内外兵馬事

“二月 国祖廟を祀り、大赦をした。考仇道を葛文王に封じた。”

親祀國祖廟 大赦 封考仇道爲葛文王

“五年 338, 266 八月 百濟が烽山城を攻めた。城主は壯士二百人を率いて出撃し、賊を敗走させた。”

百濟來攻烽山城 城主直宣 率壯士二百人 出撃之 賊敗走

“十一年 344, 272 十一月 百濟が境界を侵した。”

百濟侵邊

“十七年 350 278 十月 百濟兵が來て槐谷城を囲んだ。波珍?の正源に命じて、領兵にこれを拒まさせた。”

百濟兵來圍槐谷城 命波珍滄正源 領兵拒之

“二十年 353, 281 正月 弘權を伊滄とし、良質を一吉滄とし、光謙を沙滄した。”

拜弘權爲伊滄 良質爲一吉滄 光謙爲沙滄

“二月 (訳)”

謁祖廟

“二十二年 355, 283 九月 百濟が境界を侵した。”

百濟侵邊

“十月 槐谷城を囲んだ。一吉滄の良質に兵を率いてこれを防ぐように命じた。”

圍槐谷城 命一吉滄良質 領兵禦之

“二十三年 356, 284 十月 王は薨じた。”

王薨 葬大陵

晋書には次の馬韓の王の記事がある。

武帝太康元年 280 其王遣使獻方物 二年 281 復來朝貢 七年 286 又來

15.17. 第17代 金2 奈勿尼師今 356-402

% A4, , 9895 新羅 03

“仇道葛文王の孫で、父は末仇角干である。母は金氏の休禮夫人で、妃は金氏で味鄒王の女である。”

仇道葛文王之孫也 父末仇角干 母金氏休禮夫人 妃金氏 味鄒王女

“三年 358 二月 始祖廟を祀った。”

親祀始祖廟

“九年 364 四月 倭兵大挙してきた。王はこれを聞き、敵わないことを恐れ、数千の草人形を造り兵の衣服を着せ、吐含山下に並べ、勇士一千と斧峴東原に伏せた。倭人は直進してきた。伏兵でその不意を突くと、倭人は敗走した。”

倭兵大至 王聞之 恐不可敵 造草偶人數千 衣衣持兵 列立吐含山下 伏勇士一千於斧峴東原 倭人恃衆直進 伏發擊其不意 倭人大敗走 追擊殺之幾盡

“十一年 366 三月 百濟人が來聘した。”

百濟人來聘

“十三年 368 春 百濟が使いを送り、良馬二匹を贈った。”

百濟遣使 進良馬二匹

“十八年 373 百濟の禿山城主が三百人を率いて來投した。王は六部に分居させた。”

百濟禿山城主 率人三百來投 王納之 分居六部 百濟王移書曰・・・

“二十六年 381 衛頭を苻秦に派遣し、方物を貢いだ。苻堅は衛頭に、卿のいう海東の事は伝えられたことと異なるが何故か、と問うた。中国も時代

とともに変わり、名号も改易されていると答えた。”

遣衛頭入苻秦 貢方物 苻堅問衛頭曰 卿言海東之事與古不同 何耶 答曰 亦猶中國
時代變革 名號改易 今焉得同

“三十七年 392 正月 高句麗が使いをよこした。王は高句麗が強盛なため、
伊漚の大西知の子實聖を質として送った。”

高句麗遣使 王以高句麗強盛 送伊漚大西知子實聖爲質

“三十八年 393 五月 倭人が来て金城を囲み、五日間は解けなかった。將
士は皆出戦を請うたが、王は言った・・・”

倭人來圍金城 五日不解 將士皆請出戰 王曰 今賊棄舟深入 在於死地 鋒不可當
乃閉城門 賊無功而退 王先遣勇騎二百 遮其歸路 又遣步卒一千 追於獨山 夾擊大敗
之 殺獲甚衆

“四十年 395 八月 靺鞨が北邊を侵した。王は出師し、悉直之原でこれを
大敗させた。”

靺鞨侵北邊 出師 大敗之於悉直之原

“四十六年 401 七月 高句麗の人質であった實聖が還った。”

高句麗質子實聖還

“四十七年 402 二月 王は薨じた。”

王薨

15.18. 第18代 金3 實聖尼師今 402-417

% A4, ,9925 新羅 03

“閼智の裔孫で、大西知伊滄の子である。母は伊利夫人で昔登保阿干の女で、妃は味鄒王の女である。”

閼智裔孫 大西知伊滄之子 母伊利夫人 昔登保阿干之女 妃味鄒王女也

“元年 402 三月 倭国と通好した。奈勿王子の未斯欣を質とした。”

與倭國通好 以奈勿王子未斯欣爲質

“二年 403 正月 未斯品を舒弗邯とし、軍國之事を委ねた。”

以未斯品爲舒弗邯 委以軍國之事

“七月 百濟が境界を侵した。”

百濟侵邊

“三年 404 二月 (訳)”

親謁始祖廟

“四年 405 四月 倭兵が来て明活城を攻めた。失敗して帰った。王騎兵を率いて、獨山之南で再戦しこれを破った。”

倭兵來攻明活城 不克而歸 王率騎兵 要之獨山之南 再戰破之 殺獲三百餘級

“六年 407 三月倭人が東邊を侵した。”

倭人侵東邊

“六月 再び南邊を侵し、一百人を奪掠した。”

又侵南邊 奪掠一百人

“七年 408 二月 王は倭人が對馬島で野營し、兵革と資糧を貯え、我々を襲おうとしてきると聞いた。王は機先を制してこれを撃破しようとしたが、

舒弗邯の未斯品がこれを諫め、王は従った。”

王聞 倭人於對馬島置營 貯以兵革資糧 以謀襲我 我欲先其未發 揀精兵擊破兵儲
舒弗邯未斯品曰 臣聞 兵凶器 戰危事 況涉巨浸以伐人 萬一失利 則悔不可追 不若
依嶮設關 來則禦之 使不得侵猾 便則出而禽之 此所謂致人而不致於人 策之上也 王
從之

“十一年 412 奈勿の王子のト好を高句麗への質とした。”

以奈勿王子ト好 質於高句麗

“十四年 415 八月 倭人と風島で戦い、克った。” 與倭人戰於風島 克之

“十六年 417 五月 王は薨じた。” 王薨

15.19. 第19代 金4 訥祇麻立干 417-458

% A4, , 9958 新羅 03

“母は保反夫人で味鄒王の女である。妃は實聖王の女である。實聖は高句麗の人質となり、還って王となった。・・・(理解不十分)王を弑し、自ら立った。”

母保反夫人 味鄒王女也 妃實聖王之女 奈勿王三十七年
以實聖質於高句麗 及實聖還爲王 怨奈勿質己於外國 欲害其子以報怨 遣人招在高句麗時相知人 因密告 見訥 祇則殺之 遂令訥祇往 逆於中路 麗人見訥祇 形神爽雅 有君子之風 遂告曰 爾國王使我害君 今見君 不忍賊害 乃歸 訥祇怨之 反弑王自立

王朝内(外)で何らかの対立があったのではないか。

二年 418 正月 (訳)”

親謁始祖廟

“王弟のト好が堤上奈麻とともに高句麗より還り來た。”

王弟ト好 自高句麗 與堤上奈麻還來

“秋 王弟の未斯欣が倭国より逃げ還った。”

王弟未斯欣 自倭國逃還

王弟が高句麗と倭に人質となっていた。高句麗は前王十一年にあるが倭は？ 即位後にある高官の人事がない。次の 高句麗修聘 の記事は、この後処理の可能性がある。

“八年 424 二月 高句麗に使いを派遣し、修聘した。”

遣使

“十五年 431 四月 倭兵が来て東邊を侵し、明活城を囲んだ。功なく退ぞいた。”

倭兵來侵東邊 圍明活城 無功而退

“六月 再び東邊を侵した。”

又侵東邊

“十七年 433 七月 百済が請和の使いを派遣した。これに従った。”

百済遣使請和 從之

“十八年 434 二月 百済王が良馬二匹を送ってきた。”

百済王送良馬二匹

“九月 また、白鷹を送ってきた。”

又送白鷹

“十月 王は黄金と明珠百済の招きに応じた。”（聘の理解が不十分）

王以黄金・明珠 報聘百済

“十九年 435 四月 始祖廟を祀った。”

祀始祖廟

祀と謁と差があるのか。

“二十四年 440 倭人が南邊を侵し、生口を掠取し去った。”

倭人侵南邊 掠取生口而去

“六月 また、東邊を侵した。”

又侵東邊

“二十八年 444 四月 倭兵が金城を十日間囲み、糧を盡く持ち帰った。王は出兵し追おうとしたが、左右が言った・・・。”

倭兵圍金城十日 糧盡乃歸 王欲出兵追之 左右曰・・・

倭兵の最後。九州の邪馬台の東征が残存部隊の移住の段階になったのか。

“三十四年 450 七月 高句麗の邊將が悉直之原で獵をした。何瑟羅城主三直は出兵し掩殺した。高句麗王はこれを聞いて怒り、非難の使いを送ってきた。王は謝まり、使者は帰った。”

高句麗邊將 獵於悉直之原 何瑟羅城主三直 出兵掩殺之 麗王聞之怒 使來告曰 孤與大王 修好至歡也 今出兵殺我邊將 是何義耶 乃興師侵我西邊 王卑辭謝之 乃歸

“三十八年 454 八月 高句麗が北邊を侵した。” 高句麗侵北邊

“三十九年 455 十月 高句麗が百濟を侵した。王は兵を派遣し百濟を救った。” 高句麗侵百濟 王遣兵救之

“四十二年 458 八月 王は薨じた。” 王薨

正史に現れる王は、法興王である。金氏は

閼智→勢漢→阿道→首留→郁甫→仇道→味鄒

→末仇→奈勿→訥祇

大西知→実聖

となっている。

角干 (1等官)

訥祇からは麻立干

次の慈悲麻立干 458-479 から国政改革が始まった気がする。

15.20. 第20代 金5 慈悲麻立干 458-479

% A4, , 10009 新羅 03

“母は金氏で實聖の女である。”

母金氏 實聖之女也

“二年 459 二月 (訳)”

謁始祖廟

“四月 倭人が兵船百艘餘りで東邊を襲い、進んで圍月城を囲んだ。王は城を守り、賊將を退け、出兵し擊敗した。”

倭人以兵船百餘艘 襲東邊

進圍月城 四面矢石如雨 王城守 賊將退 出兵擊敗之 追北至海口 賊溺死者過半

“五年 462 五月 倭人は活開城を襲破し、一千人を虜にし去った。”

倭人襲破活開城 虜人一千而去

“六年 463 二月 倭人が敵良城を侵し、勝てずに去った。王は伐智・徳智に追撃させ大敗させた。王は倭人の侵入のため、縁邊に二城を築いた。”

倭人侵敵良城 不克而去 王命伐智・徳智 領兵伏候於路 要撃大敗之 王以倭人侵疆
場 縁邊築二城

“十年 467 春 有司に命じ戦艦を修理した。”

命有司修理戦艦

“十一年 468 春 高句麗と靺鞨が北邊の悉直城を襲った。”

高句麗與靺鞨 襲北邊悉直城

“九月 年十五以上の羅人を徴集し、泥河で城を築いた。”

徴何瑟羅人年十五已上 築城於泥河

“十三年 470 三年かかって山城を築いた。”

築三年山城

“十四年 471 二月 老城を築いた。”

築老城

“十六年 473 正月 阿伐智と級德智を左右將軍とした。”

以阿伐智級德智 爲左右將軍

“十七年 474 一牟・沙尸・廣石・沓達・仇禮・坐羅らの城を築いた。”

築一牟・沙尸・廣石・沓達・仇禮・坐羅等城

“七月 高句麗王の巨連は自ら兵を率いて百濟を攻めた。百濟王の慶は子の文周を派遣し援けを求めた。(新羅に) 王は出兵し救けた。” 高句麗

王巨連 親率兵攻百濟 百濟王慶 遣子文周求援 王出兵救之 未至百濟已陷 慶亦被害

“十八年 475 正月 王は明活城に居を移した。”

王移居明活城

“十九年 476 六月 倭人が東邊を侵した。王は將軍德智に命じこれを擊敗し、二百餘人を殺虜した。” 倭人侵東邊 王命將軍德智擊敗之 殺虜二百餘人

“二十年 477 五月 倭人が擧兵し、五道により來侵したが、失敗して還った。” 倭人擧兵 五道來侵 竟無功而還

“二十二年 479 二月 王は薨じた。”

王薨

南齊書では、

太祖建元元年 479 進號驃騎大將軍

加羅國 三韓種也

國王荷知使來獻 詔曰：量廣始登 遠夷洽化 加羅王荷知款關海外 奉贄東遐 可授輔

國將軍 本國王

倭國 在帶方東南大海島中 漢末以來 立女王 土俗已見前史

進新除使持節 都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六國諸軍事 安東大將軍

倭王武號爲鎮東大將軍

順帝昇明二年 478 遣使上表曰 倭王武の有名な上奏文

15.21. 第21代 金6 炤知麻立干 479-500

% A4, , 10064 新羅 03

“母は金氏で舒弗邯の未斯欣の女で、妃は善兮夫人で乃宿伊伐滄の女である。”
母金氏 舒弗邯未斯欣之女 妃善兮夫人 乃宿伊伐滄女也

“元年 479 大赦をし、百官に爵一級を賜った。” 大赦 賜百官爵一級

“二年 480 二月 始祖廟を祀った。” 祀始祖廟

“十一月 靺鞨は北邊を侵した。” 靺鞨侵北邊

“三年 481 三月 高句麗と靺鞨が北邊に侵入し、狐鳴等七城を取った。また、軍を彌秩夫に進めた。我が軍と百濟と加耶の援兵で分道し禦いだ。賊は敗退し、追撃して泥河西でこれを破り、斬首し千餘級を得た。”

高句麗與靺鞨入北邊 取狐鳴等七城 又進軍於彌秩夫 我軍與百濟 加耶援兵 分道
禦之 賊敗退 追撃破之泥河西 斬首千餘級

“四年 482 五月 倭人が境界を侵した。” 倭人侵邊

“六年 484 正月 烏含を伊伐滄とした。” 以烏含爲伊伐滄

“七月 高句麗が北邊を侵した。我が軍と百濟は共に母山城下で撃ち、大破した。”
高句麗侵北邊 我軍與百濟 合撃於母山城下 大破之

“七年 485 二月 仇伐城を築いた。” 築仇伐城

“四月 守廟を二十家に増置した。” 親祀始祖廟 増置守廟二十家

“五月 百濟が來聘した。” 百濟來聘

“八年 486 正月 伊實竹を將軍とした。” 拜伊實竹爲將軍

“二月 乃宿を伊伐滄とし、国政に加えた。” 以乃宿爲伊伐滄 以參國政

“四月 倭人が境界を侵した。” 倭人犯邊

“九年 487 二月 神宮を奈乙に置いた。奈乙は始祖の生まれた處である。”

置神宮於奈乙 奈乙始祖初生之處也

神宮の初出。これまでは、親祀始祖廟のような記事。

“三月 四方に郵驛を置き、所司に官道の修理を命じた。”

始置四方郵驛 命所司修理官道

“十年 488 正月 王は月城に居を移した。” 王移居月城

“七月 刀那城を築いた。” 築刀那城

月城は慶州市にある月城であろう。これ以前は何処にいたのか。

Wikipedia「月城（慶州）」歴史では

三国史記によれば、新羅には最初、赫居世居西干 21 年 BC37 に王都である金城が構築され、赫居世王 26 年 BC32 春正月には金城内に宮殿が造営された。次いで婆娑尼師今 22 年 101、金城の東南に月城あるいは在城といわれた城が築造されたという。このため当初の王宮については金城の記述が挙げられ、その後も見られるものの、金城はあくまで王京(王都)の呼称と考えられることから所在が明確でないのに対して、月城は王宮として確かなものとされる。

月城の築城される場所には当初、瓠公の家宅があったが、新羅第4代の王(尼師今)となる脱解(在位 57-80 年)が吐含山より見下ろして良地として選び、詭計により奪取した後、王位に就くとそこに住んだという。そして婆娑王 22 年 101 春 2 月に城を築いて月城と名づけ、秋 7 月、王が移居したとされる。しかし、この年代には異論が見られる。

と書かれてる。

“十一年 489 九月 高句麗が北邊を襲った。” 高句麗襲北邊 至戈

“十月 狐山城を陥れた。” 陥狐山城

“十五年 493 三月 百濟王の牟大が請婚の使いを送ってきた。王は伊伐比智の女を送った。” 百濟王牟大 遣使請婚 王以伊伐比智女送之

“七月 臨海と長嶺の二鎮を置き、倭賊に備えた。”

置臨海・長嶺二鎮 以備倭賊

倭賊 は初出?

“十六年 494 七月 將軍實竹らは高句麗と薩水之原で戦ったが、勝てずに犬牙城に退いた。高句麗兵はこれを囲んだ。百濟王牟大は兵三千を派遣し、圍みを解いた。” 將軍實竹等與

高句麗 戰薩水之原 不克 退保犬牙城 高句麗兵圍之 百濟王牟大 遣兵三千 救解圍

“十七年 495 正月 神宮を祀った。” 王親祀神宮

“八月 高句麗が百濟の雉壤城を囲んだ。百濟が救援を要請し、王は將軍德智に命じ兵を率いて救わせた。高句麗潰走し、百濟王は感謝の使いを送ってきた。”

高句麗圍百濟雉壤城

百濟請救 王命將軍德智 率兵以救之 高句麗衆潰 百濟王遣使來謝

“十八年 496 二月 加耶國が白雉を贈ってきた。”

加耶國送白雉 尾長五尺

三月 宮室を修復した。

重修宮室

“七月 高句麗が来て牛山城を攻めた。將軍實竹が出撃し、泥河上で破った。”

高句麗來攻牛山城 將軍實竹出擊 泥河上破之

“十九年 497 四月 倭人が境界を侵した。”

倭人犯邊

“八月 高句麗が牛山城を攻め陥とした。”

高句麗攻陷牛山城

“二十二年 500 三月 倭人が長峰鎮を攻め陥とした。”

倭人攻陷長峰鎮

“十一月 王は薨じた。”

王薨

倭人の最後の記事である。

二年と七年に祀始祖廟。九年に始祖初生之處の奈乙に神宮を造営した。十七年に親祀神宮とあり、以後の王は親祀神宮。伊勢神宮はこれをまねたのか、元が同じか？

この王から諱が記されている。以前の王は無かったと考える。何か制度的な改革を行おうとしていたのではないか。

炤知麻立干・智證麻立干・法興王の3代にわたって国政の基盤が整えら

れていく。徳川幕府も3代家光までかかった。この頃の新羅は、現在の大韓民国の範囲の東部の北部で、戦国時代の毛利程度か。

15.22. 第22代 金7 智證麻立干 500-514

% A4, , 10155 新羅 04

“諱は智大路で、奈勿王の曾孫の習寶葛文王の子で、知王の再従弟ある。母は金氏の鳥生夫人で、訥祇王の女である。妃は朴氏の延帝夫人で、登欣伊滄の女である。”

諱智大路 奈勿王之曾孫 習寶葛文王

之子 知王之再従弟也 母金氏鳥生夫人 訥祇王之女 妃朴氏延帝夫人 登欣伊滄女

“三年 502 二月 殉葬を禁じた。前国王が薨じたとき男女各五人が殉じた。ここにおいて、禁じた。神宮を祀った。”

下令禁殉葬 前國王薨 則殉以男女各五人 至是禁焉 親祀神宮

“三月 州郡主に勸農を命じた。牛耕を始めた。” 分命州郡主勸農 始用牛耕

“四年 503 十月 群臣が申し上げた：始祖の創業以来、国名が未定である。斯羅、斯盧 あるいは新羅と称している。．．．ここで群臣一同、新羅国王を謹上いたします。王はこれに従った。”

羣臣上言 始祖創業已來 國名未定 或稱斯羅 或稱斯盧 或言新羅 臣等以爲 新者德業日新 羅者網羅四方之義 則其爲國號宜矣 又觀自古有國家者 皆稱帝稱王 自我始祖立國 至今二十二世 但稱方言 未正尊號 今羣臣一意 謹上號新羅國王 王從之

“五年 504 四月 喪服法を制し施行した。” 制喪服法頒行

“秋九月 役夫を懲して、波里・彌實・珍徳・骨火ら 12 城を築いた。”

懲役夫築波里・彌實・珍徳・骨火等十二城

“六年國內州郡県を定め、悉直州を置き、異斯夫を軍主とした。軍主の名はここで始まる。”

王親定國內州郡縣 置悉直州 以異斯夫爲軍主 軍主之名 始於此

“十年 509 正月 都に東市を置いた。” 置京都東市

“十三年 512 六月 于山國が歸服し、土宜を貢とした。于山國は溟州の東海の島にある。この島は鬱陵島ともいう。”

于山國歸服 歲以土宜爲貢 于山國在溟州正東海島 或名鬱陵島

“十五年 514 正月 阿尸村に小京を置いた。” 置小京於阿尸村

“七月 王は薨じた。” 王薨

国名を新羅とし、国内制度を整備。対外記事がない。内政に専念か。

ピンイン 斯羅：sī luo、斯盧：sī lú、新羅：xīn luo

軍：jūn、郡：jùn 軍

諱が書かれているのは、始祖の赫居世とこの王以降である。

15.23. 第23代 金8法興王 514-540

% A4, , 10191 新羅 04

“諱は原宗、姓は募、名は秦である。母は延帝夫人で妃は朴氏の保刀夫人である。”
原宗 姓募名秦 母延帝夫人 妃朴氏保刀夫人

“三年 516 正月 王は神宮を祀った。” 親祀神宮

“四年 517 四月 始めて兵部を置いた。” 始置兵部

“五年 518 二月 山城を築いた。” 築株山城

“七年 520 正月 律令を頒示し、百官の公服を始めて定めた。”

頒示律令 始制百官公服 朱紫之秩

“八年 521 梁に使いを派遣し、方物を貢いだ。” 遣使於梁貢方物

梁書の次の記事 普通二年 521 王募名秦 始使使隨百濟奉獻方物 が対応する。

“九年 522 三月 加耶國王が請婚してきた。王は伊滄の比助夫の妹を送った。”
加耶國王遣使請婚 王以伊滄比助夫之妹送之

“十一年 524 九月 王は南境の拓地を巡行した。加耶國王は來會した。”

王出巡南境拓地 加耶國王來會

“十二年 525 二月 大阿滄の伊登を沙伐州軍主とした。”

以大阿滄伊登爲沙伐州軍主

“十五年 528 佛法を肇行した。高句麗より祇王時と沙門墨胡子を得た。”

肇行佛法 初訥祇王時 沙門墨胡子 自高句麗至

新羅への仏伝か。同時に仏教の公認か。次の三代の王に真がつく。

“(訳)”

(上に続き) 善郡 郡人毛禮 於家中作窟室安置 於時 梁遣使 賜衣着香物 君臣不知其香名與其所用 遣人?香?問 墨胡子見之 稱其名目曰 此焚之則香氣芬馥 所以達誠於神聖 所謂神聖未有過於三寶 一曰佛? 二曰達摩 三曰僧伽・・・

“十六年 529 殺生を禁じた。”

下令禁殺生

“十八年 531 三月 有司に堤防を修理させた。”

命有司修理隄防

“四月 伊滄の哲夫を上大等とし、国事をすべらせた。上大等官はここに始まる。今の宰相である。”

拜伊滄哲夫爲上大等 摠知國事 上大等官 始於此 如今之宰相

“十九年 532 金官國主の金仇亥と妃および三子が、長は奴宗、仲は武徳で季は武力、国帑宝物をもって來降した。王は、礼として、上等に叙し、本国を食邑とした。子の武力は角干となるまで仕えた。”

金官國主金仇亥 與妃及三子 長曰奴宗 仲曰武徳 季曰武力 以國帑寶物來降 王禮待之 授位上等 以本國爲食邑 子武力仕至角干

“二十一年 534 上大等の哲夫が卒した。”

上大等哲夫卒

“二十三年 536 年號を採用し、建元元年とした。” 始稱年號 云建元元年

元号制は定着しなかった。記事が“王名〇〇年”で始まっている。日本書紀も同様である。日本の完全な元号制は明治ではないか。

“二十五年 538 正月（訳）” 教許外官携家之任

“二十七年 540 七月 王は薨じた。諡は法興で、哀公寺北峯に葬った。”

王薨 諡曰法興 葬於哀公寺北峯

正史に王名が現れる最初の王。募は慕容を連想させる。慕容部の始祖は莫護跋。

ここから国王の称号が王となっている。朝貢のため、名前を中国風に切り替えたのか。尊称を尼斯今・麻立干から王に変えた。

15.24. 第24代 金 9 眞興王 540-576

% A4, , 10260 新羅 04

“諱は多麥宗、母は夫人金氏で法興王の女、妃は朴氏の思道夫人である。
王は幼少で王太后が攝政した。”

諱多麥宗母夫人金氏 法興王之女 妃朴氏思道夫人 王幼少 王太后攝政

“元年 540 八月 大赦をした。文武官に爵一級を賜わった。”

大赦 賜文武官爵一級

“二年 541 三月 異斯夫を兵部令とし、内外兵馬事をおこなわせる。百濟が請和の使いを寄こし、これを許した。”

拜異斯夫爲兵部令 掌内外兵馬事 百濟遣使請和 許之

“五年 544 二月 興輪寺が完成した。”

興輪寺成

“三月 人が出家し僧尼になることを許した。”

許人出家爲僧尼 奉佛

僧の統治か。私度僧は？

“六年 545 七月 伊滄の異斯夫が奏上した： 国史は君臣の善惡を記し、褒貶を万代に示すものです。修撰されておらず、後世の人は何と観るのか。王はこれを当然として、大阿滄の居柴夫らに文士を広く集め編集させるよう命じた。”

伊滄異斯夫奏曰 國史者 記君臣之善惡

示褒貶於萬代 不有修撰 後代何觀 王深然之 命大阿漚居柒夫等 廣集文士 俾之修

“九年 548 二月 高句麗と穢人が百濟の獨山城を攻めた。百濟は救援を要請し、王は將軍朱玲と兵三千を派遣した。”

高句麗與穢人 攻百濟獨山城 百濟請救 王遣將軍朱玲 領勁卒三千擊之 殺獲甚衆

“十年 549 春 梁は使いと入學僧覺徳と佛舍利を送った。王は百官に輿輪寺の前で迎えさせた。”

梁遣使與入學僧覺徳 送佛舍利 王使百官 奉迎輿輪寺前路

“十一年 550 正月 百濟は高句麗の道薩城を抜いた。” 百濟拔高句麗道薩城

“三月 高句麗は百濟の金岷城を陥した。王は兩國の兵の疲れに乗じて、伊?の異斯夫に出兵を命じ、二城を取り増築し、甲士一千留めた。” 高句麗

陷百濟金岷城 王乘兩國兵疲 命伊漚異斯夫 出兵擊之 取二城増築 留甲士一千戍之

“十二年 551 正月 開國に改元した。” 改元開國

“三月 (訳)・・・高句麗を侵し、十郡を奪った。”

王巡守次娘城 聞于勒及其弟子尼文知音樂 特喚之 王駐河臨宮 令奏其樂 二人各製新歌奏之 先是 加耶國嘉悉王 製十二弦琴 以象 十二月之律 乃命于勒製其曲 及其國亂 操樂器投我 其樂名加耶琴 王命居柒夫等 侵高句麗 乘勝取十郡

“十三年 552 王は階古・法知・萬徳の三人に、(訳)”

王命階古・法知・萬徳三人 學樂於于勒 于勒量其人之所能 教階古以琴 教法知以歌 教萬徳以舞 業成 王命奏之曰 與前娘城之音無異 厚賞焉

“十四年 553 二月 王は所司に命じ、月城東に新宮を築いた。その地で黄

龍を見た。王はこれを訝しみ、仏寺に改ため皇龍の名を賜った。”

王命所司 築新宮於月城東 黄龍見其地 王疑之 改爲佛寺 賜號曰皇龍

“七月 百濟の東北鄙を取り、新州を置き、阿漚の武力を軍主とした。”

取百濟東北鄙 置新州 以阿漚武力爲軍主

“十月 百濟の王女を娶り、小妃とした。”

娶百濟王女爲小妃

“十五年 554 七月 明活城を修築した。百濟王の明禰と加良が管山城を來攻した。軍主角干于徳と伊漚の耽知等は抗戦したが失敗であった。新州軍主の金武力と州兵が交戦した。裨將三年山郡高干都刀が百濟王を殺し、これに乗じて諸軍が勝ち、大勝であった。佐平四人と士卒二萬九千六百人を斬った。”

修築明活城 百濟王明禰與加良 來攻管山城 軍主角干于徳・伊漚耽知等 逆戦失利
新州軍主金武力 以州兵赴之 及交戦 裨將三年山郡高干都刀 急擊殺百濟王 於是 諸
軍乘勝 大克之 斬佐平四人・士卒二萬九千六百人 匹馬無反者

“比斯伐に完山州を置いた。”

十六年 555 正月 置完山州於比斯伐

“十月 王は北漢山を巡幸し、境界を定めた。”

王巡幸北漢山 拓定封疆

京城市の北の山が北漢山とされている。漢城は河南省にあり、この南は南漢山がある。両山を対と考えれば、少し離れているような気がする。

“十一月 北漢山より帰った。(訳)”

至自北漢山 教所經州郡 復一年租調 曲赦 除二罪 皆原之

“十七年 556 七月 比列忽州を置き、沙滄の成宗を軍主とした。”

置比列忽州 以沙滄成宗爲軍主

“十八年 557 国原を小京とした。沙伐州を廃し甘文州を置き、沙滄の起宗を軍主とした。新州を廃し北漢山州を置いた。”

以國原爲小京 廢沙伐州 置甘文州 以沙滄起宗爲軍主 廢新州 置北漢山州

“十九年 558 二月 (訳)”

徙貴戚子弟及六部豪民 以實國原 奈麻身得作砲弩上之 置之城上

“二十三年 562 七月 百濟が辺境を侵掠した。王は出師して拒み、一千餘人を殺獲した。”

百濟侵掠邊戸 王出師拒之 殺獲一千餘人

“九月 加耶が叛いた。王は異斯夫にこれを討つように命じた。…(訳)”

加耶叛 王命異斯夫討之 斯多含副之 斯多含領五千騎先馳 入梅檀門 立白旗 城中恐懼 不知所爲 異斯夫引兵臨之 一時盡降 論功 斯多含爲最 王賞以良田及所虜二百口 斯多含三讓 王強之 乃受 其生口放爲良人 田分與戰士 國人美之

“二十五年 564 北齊に使いを派遣し、朝貢した。”

遣使北齊朝貢

“二十六年 565 二月 北齊の武成皇帝は王を使持節東夷校尉樂浪郡公新羅王とした。”

北齊武成皇帝詔 以王爲使持節東夷校尉樂浪郡公新羅王

“九月 完山州を廃し大耶州を置いた。”

廢完山州 置大耶州

“(訳)”

陳遣使劉思與僧明觀 來聘 送釋氏經論千七百餘卷

“二十七年 566 二月 祇園・實際の二寺が完成。王子の銅輪を王太子とした。陳に朝貢。皇龍寺が畢功。”

祇園・實際二寺成 立王子銅輪爲王太子 遣使於陳貢方物 皇龍寺畢功

“二十八年 567 三月 陳に使いを派遣し、方物を貢いだ。” 遣使於陳貢方物

“二十九年 568 大昌に改元した。” 改元大昌

“六月 陳に使いを派遣し、方物を貢いだ。” 遣使於陳貢方物

“十月 北漢山州を廢し南川州を置いた。また廢比列忽州を廢し達忽州を置いた。” 廢北漢山州 置南川州 又廢比列忽州 置達忽州

行政区画の改組の記事は一部のみを引用。

“三十一年 570 六月 陳に使いを派遣し、方物を貢いだ。” 遣使於陳獻方物

“三十二年 571 陳に使いを派遣し、方物を貢いだ。” 遣使於陳貢方物

“三十三年 572 正月 鴻濟に改元した。” 改元鴻濟

“三月 王太子銅輪が卒した。北齊に使いを派遣し、朝貢した。”

王太子銅輪卒 遣使北齊朝貢

“三十五年 574 三月 皇龍寺の丈六像を鑄成した。” 鑄成皇龍寺丈六像

“三十六年 575 皇龍寺の丈六像が出涙し、涙が踵に到達した。”

皇龍寺丈六像 出涙至踵

“三十七年 576 春 安弘法師が求法のため入隋し、胡僧の毗摩と羅等の二僧と共に帰った。經と佛舍利ももたされた。”

安弘法師入隋求法 與胡僧毗摩羅等二僧廻 上稜伽勝 經及佛舍利

“八月 王は薨じた。諡は眞興とし、哀公寺北峯に葬った。王は幼年で即位した。仏に一心につくし、晩年には断髪し、僧衣を着、法雲を名のった。王妃も尼となり永興寺に住んだ。”

王薨 諡曰眞興 葬于哀公寺北峯 王幼年即位 一心奉佛 至末年祝髮被僧衣 自號法雲 以終其身 王妃亦 之爲尼 住永興寺

15.25. 第25代 金10 眞智王 576-579

% A4, , 10364 新羅 04

“諱は舍輪で眞興王の次子である。母思は道夫人で妃は知道夫人である。太子が早く卒したため、眞智が立った。”

諱舍輪 眞興王次子 母思道夫人 妃知道夫人 太子早卒 故眞智立

“元年 576 伊滄の居柒夫を上大等とし、国事を委ねた。”

以伊滄居柒夫爲上大等 委以國事

“二年 577 二月 神宮を祀り、大赦を行った。” 王親祀神宮 大赦

“十月 百濟が西邊の州郡を侵した。伊?の世宗に出師を命じ、一善北で撃破した。三千七百級を斬獲し、内利西城を築いた。”

百濟侵西邊州郡 命伊滄世宗出師 撃破之於一善北 斬獲三千七百級 築内利西城

“三年 578 七月 百濟と也山城を闘いだ。” 與百濟闘也山城

“四年 579 二月 百濟が熊峴城と松述城を築いた。それゆえ梗蒜山城・麻知峴城・内利西城への路が梗がれた。”

百濟築熊峴城・松述城 以梗蒜山城・麻知峴城・内利西城之路

“七月王は薨じた。” 王薨

15.26. 第26代 金 眞平王 579-632

% A4, , 10387 新羅 04

“諱は白淨で眞興王太子銅輪の子である。母は金氏の萬呼夫人で葛文王立宗の女で、妃は金氏の摩耶夫人で、葛文王福勝の女である。”

諱白淨 眞興王太子銅輪之子也 母金氏萬呼夫人 葛文王立宗之女 妃金氏摩耶夫人
葛文王福勝之女

“元年 579 八月 伊弩里夫を上大等とし、母の弟の伯飯を眞正葛文王に、
國飯を眞安葛文王に封じた。”

以伊弩里夫爲上大等 封母弟伯飯爲眞正葛文王 國飯爲眞安葛文王

“二年 580 二月 神宮を祀り、伊后稷を兵部令とした。”

親祀神宮 以伊后稷爲兵部令

“三年 581 正月 位和府を始めておいた。今の吏部である。”

始置位和府 如今吏部

“五年 583 正月 船府署を始めておいた。大監・弟監は各1名である。”

始置船府署 大監・弟監各一員

“六年 584 二月 建福に改元した。”

改元建福

“三月 次を置いた。調府令は1名で、貢賦を受け持つ。乗府令も1名で、
車乗を受け持つ。”

置調府令一員 掌貢賦 乗府令一員 掌車乘

“七年 585 七月 高僧智明が求法のため入陳した。” 高僧智明入陳求法

“八年 586 正月 禮部令を二員置いた。” 置禮部令二員

官制の改革、日本(倭)との比較対照表。聖徳太子は 574-632。冠位十二階は冠位を定めただけなのか。官僚制の整備も行われた？ 中国の制度を取り入れた新羅の制度に学んだのではないか。

“九年 587 七月 (訳)”

大世・仇二人適海 大世 奈勿王七世孫 伊冬臺之子也 資俊逸 少有方外志 與交遊僧
淡水曰 在此新羅山谷之間 以終一生 則何異 池魚籠鳥 不知滄海之浩大 山林之寬閑
乎 吾將乘桴泛海 以至吳越 侵尋追師 訪道於名山 若凡骨可換 神仙可學 則飄然乘
風於寥之表 此天下之奇遊壯觀 也 子能從我乎 淡水不肯 大世退而求友 適遇仇者
耿介有奇節 遂與之遊南山之寺 忽風雨落葉 泛於庭潦 大世與仇言曰 吾有與君西遊
之志 今各取一葉 爲之舟 以觀其行之先後 俄而大世之葉在前 大世笑曰 吾其行乎
仇勃然曰 予亦男兒也 豈獨不能乎 大世知其可與 密言其志 仇曰 此吾願也 遂相與
爲友 自南海乘舟而去 後不知其所往

“十年 588 十二月 上大等弩里夫が卒した。伊首乙夫を上大等とした。”

上大等弩里夫卒 以伊首乙夫爲上大等

“十一年 589 三月 圓光法師が求法のため入陳した。” 圓光法師 入陳求法

“十三年 591 二月 領客府令を二員を置いた。” 置領客府令二員

令は長官か？ 二名制？ 徳川幕府では、家老、南北奉行のように二名また

はそれ以上が月番生で務めた。これは責任回避になりやすいが、反面、独善を妨げる効果はある。

“七月 南山城を築いた。周囲は二千八百五十四歩である。”

築南山城 周二千八百五十四歩

“十五年 563 七月 明活城を改築した。周囲は三千歩である。西兄山城は周囲二千歩である。”

改築明活城 周三千歩 西兄山城 周二千歩

“十六年 594 隋帝は王を上開府樂浪郡公新羅王に叙した。”

隋帝詔 拜王爲上開府樂浪郡公新羅王

“十八年 596 三月 高僧曇育が求法のため入隋した。”

高僧曇育 入隋求法 遣使如隋貢方物

“十月 永興寺で火災がおき、350 家に延焼した。王は自らこれに臨み救った。”

永興寺火 延焼三百五十家 王親臨救之

“十九年 597 三郎寺が完成した。”

三郎寺成

“二十二年 600 高僧圓光と隨への朝貢使の奈麻の諸文・大舎の横川らが還った。”

高僧圓光 隨朝聘使奈麻諸文・大舎横川還

“二十四年 602 隋に大奈麻の上軍を使いとして派遣し、方物を進呈した。”

遣使大奈麻上軍 入隋進方物

“八月 百濟が来て阿莫城を攻めた。王は將士を使い逆戦したが、大敗し、貴山・箒項は死んだ。”

百濟來攻阿莫城 王使將士逆戰 大敗之 貴山・箒項死之

“九月 高僧智明が隨への朝貢朝と還った。王は明尊敬明し、大徳とした。”

高僧智明 隨入朝使上軍還 王尊敬明公戒行爲大徳

“二十五年 603 八月 高句麗が北漢山城を侵した。王は自ら兵一萬を率いてこれを妨げた。”

高句麗侵北漢山城 王親率兵一萬以拒之

“二十六年 604 七月 大奈麻萬世と惠文らを使いとして朝隋させた。”

遣使大の萬世・惠文等朝隋

“高僧曇育と遣隋使の惠文が還った。”

高僧曇育 隨入朝使惠文還

“秋八月 兵を発し、百濟を侵した。”

發兵侵百濟

“三十年 608 王は高句麗を侵封しようと、隋に兵を派遣し高句麗を征することを要請しようとし、圓光に修乞師表を命じた。．．．”

王患高句麗侵封 欲請隋兵以征高句麗 命圓光修乞師表 光曰 求自存而滅他 非沙門之行也 貧道在大王之土地 食大王之水草 敢不惟命是從 乃述以聞

“二月 高句麗は北境を侵し、八千人を虜獲した。” 高句麗侵北境 虜獲八千人

“四月 牛鳴山城を抜いた。”

高句麗拔牛鳴山城

“三十三年 611 (訳)”

王遣使隋 奉表請師 隋煬帝許之 行兵事在高句麗紀

“十月 百濟兵が来て岑城を百日囲んだ。縣令の讚徳は固く守ったが、力つき、城は奪われた。” 百濟兵來圍岑城百日 縣令讚徳固守 力竭死之 城沒

“三十五年 613 七月 (訳)”

隋使王世儀至皇龍寺 設百高座 邀圓光等法師 說經

“三十六年 614 二月 沙伐州を廃し、一善州を置いた。一吉日夫を軍主とした。永興寺の塑佛が自壊した。”

廢沙伐州 置一善州 以一吉日夫爲軍主 永興寺塑佛自壊

“三十八年 616 十月 百濟が來て母山城を攻めた。” 百濟來攻母山城

“四十年 618 北漢山州の軍主邊品が岑城を取り戻そうと兵を發し百濟と戦った……。”

北漢山州軍主邊品 謀復岑城 發兵與百濟戰 奚論從軍 赴敵力戰死之 論 讚德之子也

“四十三年 621 七月 (訳)”

王遣使大唐朝貢方物 高祖親勞問之 遣通直散騎常侍文素來聘

“四十四年 622 正月 王は皇龍寺に親幸した。” 王親幸皇龍寺

“二月 (訳)”

以伊龍樹爲内省私臣 初王七年 大宮・梁宮・沙梁宮三所 各置私臣 至是置内省私臣一人 兼掌三宮

“四十五年 623 正月 兵部大監二員を置いた。” 置兵部大監二員

“十月 百濟が勒弩縣を襲った。” 遣使大唐朝貢 百濟襲勒弩縣

“四十六年 624 正月 次を置いた。侍衛府大監六員、賞賜署大正一員、大道署大正一員” 置侍衛府大監六員 賞賜署大正一員 大道署大正一員

“三月 唐高祖は使いを下し、王を柱國樂浪郡公新羅王に封じた。”

唐高祖降使 冊王爲柱國樂浪郡公新羅王

“十月 百濟兵が来て我速含・櫻岑・岑・烽岑・旗懸・穴柵等六城を囲んだ。三城が滅ぼされるか投降し、級訥催合烽岑・櫻岑・旗懸三城の兵は堅守したが、勝てずに死んだ。”

百濟兵來圍我速含・櫻岑・岑・烽岑・旗懸・穴柵等六城 於是 三城或沒或降 級訥催 合烽岑・櫻岑・旗懸三城兵堅守 不克死之

“四十七年 625 十一月 (訳)”

遣使大唐朝貢 因訟高句麗塞路 使不得朝 且數侵入

“四十八年 626 七月 (訳)”

遣使大唐朝貢 唐高祖遣朱子奢來 詔諭與高句麗連和

“八月 百濟が主在城を攻め、城主東所は抗戦し戦死した。高墟城を築いた。”

百濟攻主在城 城主東所 拒戦死之 築高墟城

“四十九年 627 六月 大唐に使いを派遣し、朝貢した。” 遣使大唐朝貢

“七月 百濟の將軍沙乞は西鄙の二城を抜き、男女三百餘口を虜とした。”

百濟將軍沙乞 拔西鄙二城 虜男女三百餘口

“十一月 大唐に使いを派遣し、朝貢した。” 遣使大唐朝貢

“五十年 628 二月 百濟が岑城を囲んだ。王は出師しこれを撃破した。”

百濟圍岑城 王出師撃破之

“五十一年 629 八月 王は大將軍龍春・舒玄、副將軍信を派遣し、高句麗の娘臂城を侵した。麗人は出城し、陣を敷いた。軍勢は甚盛んで、我軍は懼れ、殊無鬪心。”

王遣大將軍龍春・

舒玄 副將軍信 侵高句麗娘臂城 麗人出城列陣 軍勢甚盛 我軍望之懼 殊無鬪心

“九月 大唐に使いを派遣し、朝貢した。”

遣使大唐朝貢

“五十三年 631 五月 伊宿と阿石品が謀叛した。”

伊宿與阿石品謀叛

“七月 (訳)”

遣使大唐獻美女二人 魏徵以爲不宜受

“五十四年 632 正月 王は薨じた。(訳)”

王薨 諡曰眞平 葬于漢只 唐太宗詔 贈左光祿大夫

記事は他の王と比べて多いが、仏教関係と高句麗・百済との抗争、隋・唐への朝貢関係で4:4:2程度か。慶州の著名な寺院の多くはこの頃と次王の時代に建てられた。

高句麗と百済との抗争では劣勢であると思われる。これにより、隋・唐に討伐を要請し、隋・唐もこれに乗って、高句麗を滅ぼすことを選んだと思われる。最終的に660年までに高句麗と百済は唐により滅ぼされることになる。この結果、満州は中国の支配下になった。

15.27. 第27代 金12 善徳王 632-647

% A4, , 10535 新羅 05

“諱は徳曼で眞平王の長女である。母は金氏の摩耶夫人である。”

諱徳曼 眞平王長女也 母金氏摩耶夫人

“元年 632 二月 (訳)”

以大臣乙祭摠持國政

“十月 (訳)”

遣使撫問國內鰥寡孤獨不能自存者 賑恤之

“十二月 唐に使いを派遣し朝貢した。”

遣使入唐朝貢

“二年 633 正月 神宮を祀り、大赦をした。(訳)”

親祀神宮 大赦 復諸州郡一年租調

“七月 唐に使いを派遣し朝貢した。”

遣使大唐朝貢

“八月 百濟が西邊を侵した。”

百濟侵西邊

“三年 634 正月 仁平に改元した。”

改元仁平

“芬皇寺が完成した。”

芬皇寺成

“四年 635 (訳)”

唐遣使持節 冊命王爲柱國樂浪郡公新羅王 以襲父封

“靈廟寺が完成した。”

靈廟寺成

“十月 (訳)”

遣伊水品・龍樹(仏教の龍樹ではない。)

“五年 636 正月 伊水品を上大等とした。”

拜伊水品爲上大等

“三月 (訳)”

王疾 醫無效 於皇龍寺設百高座 集僧講仁王經 許度僧一百人

“五月(訳)”

蝦大集宮西玉門池 王聞之 謂左右曰 蝦怒目 兵士之相也 吾嘗聞 西南邊亦有地名
玉門谷者 意或有隣國兵潛入其中乎 乃命將軍闕川・弼吞 率兵 往搜之 果百濟將軍于
召 欲襲獨山城 率甲士五百人 來伏其處 闕川掩擊盡殺之

“慈藏法師が求法のため入唐した。”

慈藏法師 入唐求法

“六年 637 正月 伊思眞を舒弗邯とした。”

拜伊思眞爲舒弗邯

“七月 闕川を大將軍とした。”

拜闕川爲大將軍

“七年 638 十月 高句麗が北邊七重城を侵した。百姓は驚擾し、山谷に逃
れた。王大將軍闕川に命じ、彼らを安集した。”

高句麗侵北邊七重城 百姓驚擾入山谷 王命大將軍闕川 安集之

“十一月 闕川は高句麗兵と七重城外で戦い、これに克った。”

闕川與高句麗兵 戰於七重城外 克之 殺虜甚衆

“八年 639 二月 (訳)”

以何瑟羅州爲北小京命沙眞珠鎮之

“九年 640 五月 (訳)”

王遣子弟於唐 請入國學 是時 太宗大徵天下名儒爲學官 數幸國子監 使之講論 學
生能明一大經已上 皆得補官 增築學舍千二百間 增學生滿三千二百六十員 於是 四

方學者 雲集京師 於是 高句麗・百濟・高昌・吐蕃 亦遣子弟入學

“十一年 642 正月 大唐に使いを派遣し、方物を献じた。” 遣使大唐獻方物

“七月 (訳)”

百濟王義慈大舉兵 攻取國西四十餘城

“八月高句麗と謀り、党項城を取った。このため、歸唐の路が絶え、王は太宗に急を告げる使いを送った。”

又與高句麗謀 欲取党項城 以絶歸唐之路 王遣使 告急於太宗

“是月 百濟將軍允忠は兵を率い大耶城を攻め抜いた。都督の伊品釋 舍知竹竹・龍石等が戦死した。”

百濟將軍允忠 領兵攻拔大耶城 都督伊品釋 舍知竹竹・龍石等死之

“冬王が百濟を討とうとしたとき、大耶之役の報を聞き、金春秋を高句麗に派遣した。”

王將伐百濟 以報大耶之役 乃遣伊金春秋於高句麗

“十二年 643 正月 唐に使いを派遣し、方物を献じた。” 遣使大唐獻方物

“三月 入唐求法高僧の慈藏が還った。” 入唐求法高僧慈藏還

“九月 (訳)”

遣使大唐上言 高句麗・百濟侵凌臣國 累遭攻襲數十城 兩國連兵 期之必取 將以今茲九月大舉 下國社稷必不獲全 謹遣陪臣歸命大國 願乞偏師 以存救援 帝謂使人曰 我實哀爾爲二國所侵 所以頻遣使人 和爾三國 高句麗・百濟旋踵翻悔

“十三年 644 正月 (訳)”

遣使大唐獻方物 太宗遣司農丞相里玄獎 齎璽書 賜高句麗曰 新羅委命國家 朝貢

不闕 爾與百濟 宜即兵 若更攻之 明年當出師 擊爾國矣 蓋蘇文謂玄獎曰 高句麗・新羅 怨隙已久 往者隋室相侵 新羅乘釁 奪高句麗五百里之地 城邑皆據有之 非返地還城 此兵恐未能已 玄獎曰 已往之事 焉可追論 蘇文竟不從

“九月 王は信を大將軍とし百濟を伐たせ、大勝し、七城を取った。”

王命信爲大將軍 領兵伐百濟 大克之 取城七

“十四年 645 正月 (訳)”

遣使大唐貢獻方物 信自伐百濟還 未見王 百濟大軍復來寇邊 王命拒之 遂不至家 往伐破之 斬首二千級

“三月 皇龍寺塔を作った。これは慈藏の要請によるものである。”

創造皇龍寺塔 從慈藏之請也

“五月 (訳)”

太宗親征高句麗 王發兵三萬以助之 百濟乘虛 襲取國西七城

“十一月伊曇を上大等とした。”

拜伊曇爲上大等

“十六年 647 正月 王は薨じた。”

王薨 諡曰善德 葬于狼山

初めての女王である。女性が王位を継ぐのは新羅と倭(日本)のみである。
推古天皇は 593 から 628 年で、少し早い。

15.28. 第28代 金13 眞徳王 647-654

% A4, , 10626 新羅 05

“名は勝曼で葛文王の女である。母は朴氏の月明夫人である。”

名勝曼 葛文王之女也 母朴氏月明夫人

“元年 647 正月 (訳)”

誅曇 坐死者三十人

“二月 伊闕川を上大等とし、大阿守勝を牛頭州軍主とした。”

拜伊闕川爲上大等 大阿守勝爲牛頭州軍主

“ (訳)”

唐太宗遣使持節 追贈前王爲光祿大夫 仍冊命王爲柱國封樂浪郡王

“七月 唐に使いを派遣し謝恩した。”

遣使入唐謝恩

“太和に改元した。”

改元太和

“十月 百濟兵が茂山・甘勿・桐岑の三城を囲んだ。王は信と歩騎一萬を派遣しこれにあたらせたが、苦戦したが撃退した。”

百濟兵圍茂山・甘勿・桐岑三城 王遣信 率歩騎一萬以拒之 苦戰氣竭 信麾下丕寧子及其子擧眞 入敵陣急格死之 衆皆奮擊 斬首三千餘級

“神宮を祀った。”

十一月 王親祀神宮

“二年 648 正月 大唐に使いを派遣し、朝貢した。”

遣使大唐朝貢

“三月 百濟將軍義直が西邊を侵した。王は押督州都督信に命じ撃退し

た。．．．”

百濟將軍義直 侵西邊 陷腰車等一十餘城 王患之 命押督州都督信以謀之 信於是
訓勵士卒 將以發行 義直拒之 信分軍爲三道 夾擊之 百濟兵敗走

“冬（訳）”

使邯帙許朝唐 太宗勅御史問 新羅臣事大朝 何以別稱年號 帙許言 曾是天朝未頒
正朔 是故先祖法興王以來 私有紀年 若大朝有命 小國又何敢焉 太宗然之 遣伊金春
秋及其子文王朝唐 太宗遣光祿卿柳亨 郊勞之 既至 見春秋儀表英偉 厚待之 春秋請
詣國學 觀釋奠及講論 太宗許之

“三年 649 正月（訳）”

始服中朝衣冠

“八月 百濟將軍殷相が石吐等七城を攻め陥した。王は大將軍信と將軍陳
春・竹旨・天存等に抗戦するように命じた。”

百濟將軍殷相率衆來 攻陷石吐等七城 王命大將軍信 將軍陳春・竹旨・天存等出拒
之 轉鬪經旬不解 進屯於道薩城下 信謂衆曰

“四年 650 六月（訳）”

遣使大唐 告破百濟之衆 王織錦作五言太平頌 遣春秋子法敏 以獻唐皇帝 其辭曰
大唐開洪業 巍巍皇猷昌 止戈戎衣定 修文繼百王 統天崇雨施 理物體含章 深仁諧日
月 撫運邁時康 幡旗何赫赫 鉦鼓何鏗鏘 外夷違命者 剪覆被天殃 淳風凝顯 遐邇競
呈祥 四時和玉燭 七曜巡萬方 維嶽降宰輔 維帝任忠良 五三成一德 昭我唐家皇 高
宗嘉焉 拜法敏爲太府卿以還 是歲 始行中國永徽年號

“五年 651 二月（訳）”

改稟主爲執事部 仍拜波珍竹旨爲執事中侍 以掌機密事務

“波珍金仁問を唐に派遣し、朝貢した。”

遣波珍金仁問 入唐朝貢

“六年 652 正月（訳）”

以波珍天曉爲左理方府令 遣使大唐朝貢

“七年 653 十一月 大唐に使いを派遣し、金總布を献上した。”

遣使大唐 獻金總布

“八年 654 三月 王は薨じた。．．．”

王薨 諡曰眞德 葬沙梁部 唐高宗聞之 爲舉哀於永光門 使太常丞張文收持節吊祭

之 贈開府儀同三司

15.29. 第29代 金14 武烈王 654-661

% A4, , 10672 新羅 05

“諱は春秋で眞智王子伊龍春の子である。母は天明夫人で眞平王の女で、妃は文明夫人で舒玄角の女である。” 諱春秋

眞智王子伊龍春(一云龍樹)之子也 母天明夫人 眞平王女 妃文明夫人 舒玄角女也

“元年 654 四月 王考を文興大王に追封し、母を文貞太后とした。”

追封王考爲文興大王 母爲文貞太后

“五月 唐使持節備禮を遣わし、開府儀同三司新羅王に封じた。王は唐にお礼の使いを派遣した。”

唐遣使持節備禮 冊命爲開府儀同三司新羅王 王遣使入唐表謝

“二年 655 正月 伊金剛を上大等とし、波珍の文忠を中侍とした。”

拜伊金剛爲上大等 波珍文忠爲中侍

“(訳)”

高句麗與百濟・靺鞨連兵 侵軼我北境 取三十三城 王遣使入唐求援

“三月 (訳)”

唐遣營州都督程名振 左右衛中郎將蘇定方 發兵擊高句麗

“(訳)”

立元子法敏爲太子 庶子文王爲伊 老且爲海 仁泰爲角 智鏡・愷元各爲伊

“三年 656 金仁問が唐から帰った。ついで、軍主に任じ、築山城をまかせた。”

金仁問自唐歸 遂任軍主 監築山城

“七月 (訳)”

遣子左武衛將軍文王朝唐

“四年 657 七月 一善郡で大水が発生し、溺死者が三百人余りであった。東の吐含山では山火事がおき、三年で消えた。興輪寺の門が自壊した。”

一善郡大水 溺死者三百餘人 東吐含山地燃 三年而滅 興輪寺門自壞

悪い予兆を列挙。

“五年 658 正月 (訳)”

中侍文忠改爲伊 文王爲

“三月 (訳)”

王以何瑟羅地連靺鞨 人不能安 罷京爲州 置都督以鎮之 又以悉直爲北鎮

六年 659 四月 百濟頻犯境 王將伐之 遣使入唐乞師

百濟が頻繁に境界を犯した。王はこれを伐ろうとし、唐に朝貢し派兵を乞うた。

八月 以阿眞珠爲兵部令

眞珠を兵部令とした。

“十月 (訳)”

王坐朝 以請兵於唐不報 憂形於色 忽有人於王前 若先臣長春・罷郎者 言曰 臣雖枯骨 猶有報國之心 昨到大唐 認得皇帝命大將軍蘇定方等 領兵以來年五月 來伐百濟

“七年 660 正月 上大等の金剛が卒した。伊金信を上大等とした。”

上大等金剛卒 拜伊金信爲上大等

“三月 唐の高宗は左武衛大將軍蘇定方を神丘道行軍大摠管に任じた。”

唐高宗命左武衛大將軍蘇定方 爲神丘道行軍大摠管

660-661 唐と高句麗・百濟の戦闘の記事

“八年 661 二月 百濟の殘賊が來攻泗城を來攻した。” 百濟殘賊 來攻泗城

“六月 王は薨じた。諡を武烈とし、永敬寺北に葬った。”

王薨 諡曰武烈 葬永敬寺北

28.30. 第30代 金15 文武王 661-681

% A4, , 10723 新羅 06, 07

“諱は法敏で太宗王の元子である。母は金氏の文明王后で蘇判舒玄の季女で信の妹である。”

諱法敏 太宗王之元子 母金氏文明王后 蘇判舒玄之季女 信之妹也

“元年 661 六月 儒敦などをもたらした入唐宿衛の仁問は王に告げた： 皇帝は蘇定方を派遣し、水陸三十五道の兵を率いさせて高句麗をうつ。王に呼応して挙兵することを命じた。．．．” 入唐宿衛仁問・儒敦等至 告王 皇帝已遣蘇定方 領水陸三十五道兵 伐高句麗 遂命王舉兵相應 雖在服 重違皇帝勅命

武烈王五年の記事では、遣波珍金仁問とある。

巖基珠「唐における新羅の宿衛と賓貢」では

<https://core.ac.uk/download/pdf/71783113.pdf>

宿衛というのは、宮殿で宿直をし、皇帝を護衛する親衛兵のことであり、周時代には士大夫が、漢時代には宗室がその職務を担当した。唐代になり周辺諸国の王族たちもそれに加わる。周辺諸国から唐に宿衛の要望があると、唐はそれを受諾し、官爵や物品を与えた記録が多数ある。

金仁間は、武烈主金春秋の二男で半島統一を成した文武王の弟で、新羅が三国を統

一する際に重要な役割を果たした人物である。三国史記卷四十四には列伝金仁間伝があるが、それ以外にも太宗王条・文武王条などの記事に彼の足跡が残っている。彼は7回も唐に渡ったと言われている。最初唐丁、に渡ったのは真徳王5年(651)、23歳の時で、唐で楯衛をする。唐高宗は彼を左領軍衛賂軍に任ずる。2年後である653年、帰国し押督州の搜管になるが、援兵の要請のため655年再び入唐したのではないかと推定している。660年には唐の蘇定方が軍隊を連れて百済を滅ぼすのに助力する。この時、彼は蘇定方とともに神丘遺副大根管として唐軍の指揮もする。百済の残存勢力は日本に助けを求め、663年白村江戦闘を起こすが金仁間も加わった羅唐連合軍によって敗れてしまう。

この後、661年から662年までの戦後処理の記事が続く。

“二年 662 正月 唐の使臣は館に滞在している。ここで、王を開府儀同三司上柱國 樂浪郡王新羅王に冊命した。”

唐使臣在館 至是 冊命王爲開府儀同三司上柱國 樂浪郡王新羅王

戦後处理的な記事が続く。

“靈廟寺災が火災にあった。耽羅国主佐平徒冬音律が來降した。耽羅は武徳王以來百済に臣屬していたので佐平を官名としていた。これより、属国となる。”

靈廟寺災 耽羅國主

佐平徒冬音律 來降 耽羅自武徳以來 臣 屬百濟 故以佐平爲官號 至是 降爲屬國

“三月（訳）”

大赦 王以既平百濟 命所司設大

“七月 金仁問を唐に派遣し、方物を貢いだ。”

遣伊金仁問 入唐貢方物

“八月百濟の殘賊が斯只城を襲った。欽純等十九將軍を派遣し、これを破った。”

百濟殘賊 屯聚内斯只城作惡 遣欽純等十九將軍 討破之

“三年 663 正月 長倉を南山新城に造る。富山城を築く。”

作長倉於南山新城 築富山城

“二月 欽純・天存は百濟の居列城を攻め取った。居勿城を攻め、沙平城を降伏させ、徳安城を攻めた。”

欽純・天存領兵 攻取

百濟居列城 斬首七百餘級 又攻居勿城・沙平城降之 又攻徳安城 斬首一千七十級

“夏四月 大唐は我国を林大都督府とし、王を林州大都督とした。”

大唐以我國爲林大都督府 以王爲林州大都督

“五月（訳）”

震靈廟寺門 百濟故將福信及浮圖道 迎故王子扶餘豊立之 圍留鎮郎將劉仁願於熊津城 唐皇帝詔仁軌 檢校帶方州刺史 統前都督王文度之衆與我兵 向百濟營・・・

四年、五年も戦後処理の記事。

“五年 665（訳）”

・・・於是 仁軌領我使者及百濟・耽羅・倭人四國使 浮海西還 以會祠泰山 立王子政明爲太子 大赦

六年 666 四月 靈廟寺災

靈廟寺が災害にあった。

“天存の子漢林と信の子三光、共に奈麻、は入唐宿衛した。既に百済を平定していることから、王は高句麗を滅ぼすことを望み、唐に援兵を要請した。”

天存之子漢林 信之子三光 皆以奈麻入唐宿衛 王以既平百濟 欲滅高句麗 請兵於唐

“十二月 唐は、李勣を遼東道行軍大摠管とし、司列少常伯の安陸と處俊を副として、高句麗を撃つ。”

唐以李勣爲遼東道行軍大摠管 以司列少常伯安陸 處俊副之 以擊高句麗

“七年 667 七月 (訳)”

唐皇帝勅以智鏡・愷元爲將軍 赴遼東之役 王即以智鏡爲波珍 愷元爲大阿 又皇帝勅以日原大阿爲雲麾將軍 遣大奈麻汁恒世 入唐朝貢 高宗命劉仁願・金仁泰從卑列道 又徵我兵 從多谷・海谷二道 以會平壤

“八月 王は大角千金信ら三十將軍を率いて、京を出発した。”

王領大角千金信等三十將軍 出京

“九月 漢城で停まり、英公を待った。” 至漢城停 以待英公

“十月 (訳)”

英公到平壤城北二百里 差遣同兮村主大奈麻江深 率契丹騎兵八十餘人 阿珍含城 至漢城 移書以督兵期 大王從之

“十一月至塞 (訳)”

聞英公歸 王兵亦還 仍授江深位級 賜粟五百石

“十二月 (訳)”

中侍文訓卒 唐留鎮將軍劉仁願 傳宣天子勅命 助征高句麗 仍賜王大將軍旌節

“八年 668 春（訳）”

阿麻來服 遣元器與淨土入唐 淨土留不歸 元器還 有勅 此後禁獻女人

“三月 波珍の智鏡を中侍 とし、比列忽州においた。仍命波珍の龍文を摠管に任命した。”

拜波珍智鏡爲中侍 置比列忽州 仍命波珍龍文爲摠管

“六月（訳）”

遼東道安撫副大使 遼東行軍副大摠管兼熊津道安撫大使行軍摠管右 相檢校太子左中護上柱國樂城縣開國男劉仁軌 奉皇帝勅 旨 與宿衛沙金三光 到党項津 王使角千金仁問 延迎之以大禮 於是 右相約束訖 向泉岡・・・

“十二月 靈廟寺が災害にあった。”

靈廟寺災

668-669: 高句麗討伐の記事。

“九年 669 正月 信惠法師を政官大書省とした。唐僧法安が来て、天子の命を伝えた。”

以信惠法師爲政官大書省 唐僧法安來 傳天子命

戦後処理の記事。百濟・高句麗残存勢力との戦闘。

“十四年 674 正月（訳）”

入唐宿衛大奈麻德福 傳學術還 改用新法 王納高句麗叛衆 又據百濟故地 使人守之 唐高宗大怒 詔削王官爵 王弟右驍衛員外大將軍臨海郡公仁問 在京師 立以爲新

羅王 使歸國 以左庶子同中書門下三品劉仁軌爲 林道大摠管 衛尉卿李弼・右領軍大將軍李謹行副之 發兵來討

“九月 義安法師を大書省に任命し、安勝を報徳王に封じた。”

命義安法師爲大書省 封安勝爲報徳王

“十年 (訳)”

封安勝高句麗王 今再封

“十五年 675 正月 (訳)”

以銅鑄百司及州郡印 頒之

“二月 (訳)”

劉仁軌破我兵於七重城 仁軌引兵還 詔以李謹行爲安東鎮撫大使 以經略之 王乃遣使 入貢且謝罪 帝赦之 復王官爵

百濟・高句麗をめぐる抗争記事、新羅も叛いたのか。

“十六年 676 二月 (訳)”

高僧義相奉旨 創浮石寺

“十一月 (訳)”

沙施得領船兵 與薛仁貴戰於所夫里州伎伐浦 敗績 又進大小二十二戰 克之 斬首四千餘級 宰相陳純乞致仕 不允 賜几杖

“十七年 677 三月 (訳)”

觀射於講武殿南門 始置左司祿館 所夫里州獻白鷹

“十八年 678 正月 (訳)”

置船府令一員 掌船楫事 加左右理方府卿各一員 置北原小京 以大阿吳起守之

- “三月大阿春長を中侍とした。” 拜大阿春長爲中侍
- “四月 阿天訓を武珍州都督に任じた。” 阿天訓爲武珍州都督
- “(十九年 679 二月 詔)” 發使略耽羅國
- “八月 東宮を造った。内外諸門の額号を始めて定めた。四天王寺が完成した。南山城を増築した。” 創造東宮 始定内外諸門額號 四天王寺成 増築南山城
- “二十年 680 二月 伊金軍官を上大等とした。” 拜伊金軍官爲上大等
- “五月(詔)” 高句麗王使大將軍延武等 上表曰
- “耶郡に金官小京を置いた。” 加耶郡置金官小京
- “二十一年 681 王は薨じた。” 王薨 諡曰文武

次の神文王からは統一新羅。

あとがき